92-12

詩人と憲

序

題して詩人と戀といふ、敢て世の流行を趕ひたるものに非ざれども、事實は之をして斯く命名するの止むなきに到らしめたるを如何せん、蓋し戀は詩人と離るべからざる自然の性にして、詩人は戀の爲に生き戀の爲に死すと言ふも敢て不可なかるべからざればなり。

本書述る所の前二章は、著者が大膽なる『戀』と『詩人』との解釋にして、以下八章は數卷の英文學書に依り、十九世紀英詩人文豪が、重なる戀の實驗を解剖したるものなり。

著者の最も主として叙たるは、第五章に於ける狂戀の詩人シェレー、バイロン、バルンズの三詩人にして、他は皆客と見て可ならむか、要するに本書は詩人が表面の傳記に非ずして、未

だ我が學生間に普く知れ渡らざる裏面の短傳記なり、故に我が英文學研究の學生をして、本書によりて幾分の利益を吸收せしむるものとなさば、著者は之に對して費したる苦力の報酬に最も光榮を添ふるものなりと念ふ。

明治卅四年七月下旬

友人岡本君假寓の庭園
綠陰の下晩風を逐ひつ

關露香識

Percy Bysshe Shelley.

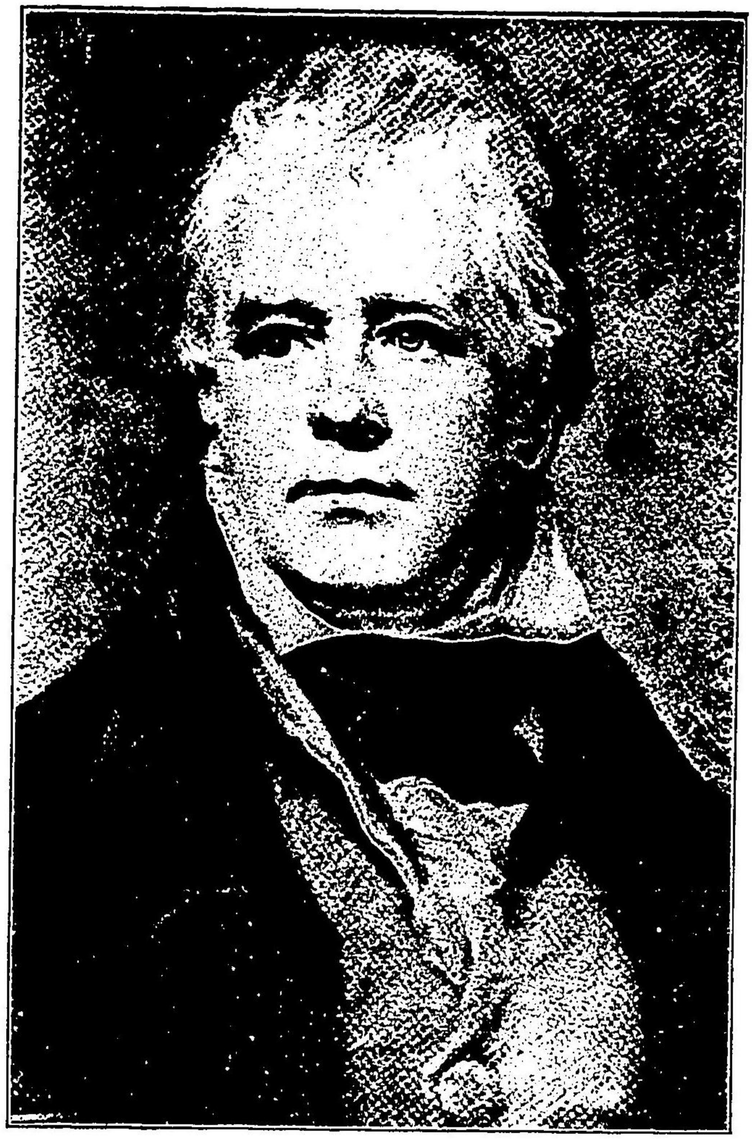
ピルシー、ビッシ ア、シェレー

Robert Burns.

ロバート、バールンズ

Thomas Carlyle.

トーマス、カールライル

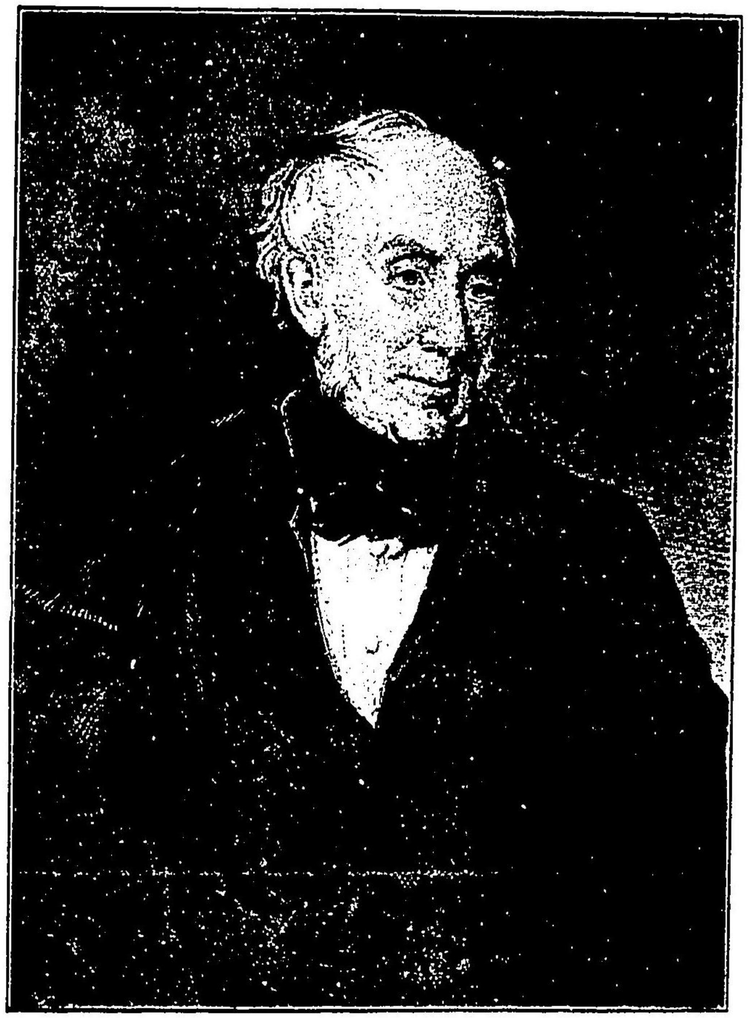


Sir Walter Scott.

サール、ウォーター、スコット

Cherles Dickens.

チヤールス、ヂッケンス

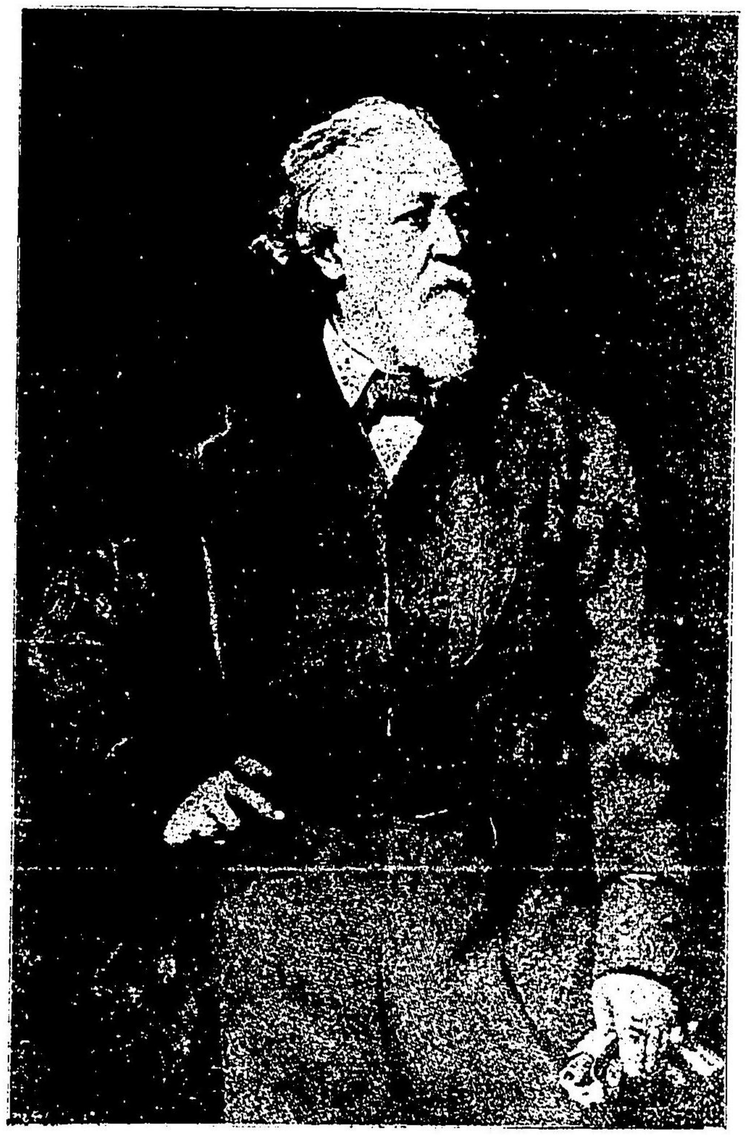


Wordsworths.

ウオルズウオース

Lord Tennyson.

ロールド、テニソン



Browning.

ブラウニング

詩人と戀

目次

第壹章

戀

一　戀と自然――詩人と戀――戀と名譽は詩人の食物なり――戀は自然の力なり――戀は何者か――戀は人の生命なり――戀と社會――戀は天性の者なり……自一頁至二頁

二　戀の平等主義――戀に貧富の別なし――戀に上下の差別なし――戀は金錢を以て購ひ難し……自二頁至三頁

三　戀は曲物――戀の王國――戀の變化……自三頁至四頁

四　戀の盲目――戀は偏頗なる明盲目なり……四頁

五　戀と勞働――戀の力……五頁

六　戀の美――美は物の極に發す――スコット湖上の佳人に歌へり――希望……自五頁至六頁

七　戀の表裏――戀の側面……六頁

八 戀の禁物――戀の錆――戀の樹木……七　頁
九 戀の重荷――戀の軛――戀の暴君――西行法師……自七頁至八頁
十 戀の完結――戀の遊景――嗤未婚青年男女……自八頁至九頁

第貳章　詩人

一 詩人と戀――詩人は戀の魔術師なり――戀の食物は不消化なり――戀に對するシエーキスピアーの言――天才の士と失戀――詩人失戀の美觀……自十頁至十一頁
二 詩人と家庭――狂味なくんば詩人たらじ――詩人は其家庭を暴らす――詩人は靈の住人なり――詩人と火事……自十一頁至十二頁
三 詩人と結婚――詩人は殘忍なる主人なり――詩人の行は惡魔なり――處女と詩人――靈に二猫……自十二頁至十三頁
四 詩人と婦人――詩人は危險なり――學才ある婦人尤も危險なり――戀の羽翼……自十三頁至十四頁

第三章　詩人獨身の詩人

一 アレキサンドル、ポープ――一輪の薔薇花――ブロントと詩人――渠未だ死せずや……自十五頁至十六頁
二 ウイリアムクーパー――憂鬱多病の詩人クーパー――純然たる士帝の官庭――牧師の妻とクーパー……自十六頁至十六頁
三 ヂエムス、タムソン――タムソン戀人を奪はれて傍觀す……十　頁
四 ジヨン、キーツ――キーツ戀人を其兄に呈せんとす――ラーブメキングはキーツが幸福なる仕事にあらず……自十八頁至十九頁
五 サミユエル、ロージエルス――婦人社會の大立者ロージエルス肘鐵砲を喰ふ……自二十頁至廿一頁
六 ゴールド、スミス――ゴルードスミスと仕立屋の娘……自廿二頁至廿三頁

第四章　獨身の文豪

一 ワシントン、アービング――アービング片身の聖書――戀人マチルダ追悼句――アービーングとバイロン……自廿二頁至廿三頁
二 デビト、ユーム――ユーム貴女に拒まる――我も然なり――ユーム佛都の美人大宴會に招かる……自廿四頁至廿五頁

三　チャルス、ラム――ラム失戀して入院す――ラムの妹其母を殺す……廿六頁
四　エドワード、ギッボン――改宗の結果ギッボン瑞西に逐はる――ギッボンと牧師の娘……自廿七頁至廿八頁
五　ヘンリー、トーマス バックル――文明史の著者結婚の恩澤に浴せず――結婚費三千磅……自廿七頁至廿八頁

第五章　四

狂戀の詩人

一　シエレー――詩人が初戀人――シエレーが黄金時代――詩人宗教觀と破約――失戀の極自殺せんとす――詩人が第二の戀人――戀人詩人が膝下に伏して助を乞ふ――百難を排して戀人を救ふ――貴族の嫡子と一珈琲店の娘――シエレー結婚の式を擧ぐ――父怒つて糧食を絶つ――渠が家庭一時の樂園――湖畔詩人に逢ふ――ゴドウインと交情を結ぶ――一新聞記者を救はんとして愛蘭土に走る――一子イヤンセー生る――妻に對する熱情漸く冷却す――妻は貴重なる一動物――戀の牢獄に投ず――シエレーが第二の戀人――三個の人影ゴドウイン家を去る――旅費盡きて金時計を賣る――遺産卅万磅――始めてバイロンと相會す――シエレーの戀に一處女其身を亡す――シエレーの夫人投身して溺死す――三度伊國に遊ぶ――英國の文星ピザに集る――渠等避暑地を探る――大慘事起る――船沈沒して溺る……自廿九頁至四十一頁

二　バイロン――バイロンの容貌――バイロンの父母――バイロンの家庭――バイロンが初戀の追懷――バイロン圖らずも男爵を相續す――マーガレットパーカーを慕ふ――バイロンの處女作――ハーロー在學中の戀人――バイロン戀人に拒絶さる――失望の極馬に鞭うちて走る――マスター夫人其罪を謝す――メルボルン夫人自殺を圖る――ラム孃バイロンを刺さんとす――バイロン、ミルバング孃を娶る――夫人バイロンを去る――バイロン瑞西に向ふ――バイロン漸く敗德の行あり――バイロン熱に犯されて逝く――希臘政府三週間の喪を發す――渠が賞揚すべき行蹟……自四十一頁至五十四頁

三　バルンズ――平民的詩人バルンズ生る――詩人が初戀メリー――第二の戀人――第三の戀人――貧窮失望裏に渠が傑作は出でたり――戀人熱病に罹りて死す――第四の戀人――不正の結婚に父は詩人を牢獄に投せんとす――百姓詩人の名遠くエデンバラ大學に響く――詩集再版五百磅の大金其身につく――再びエデンバラに赴きて失望す――第五の戀人――三度エデンバラに赴く――クラリンダと最後の別れ――詩人の死期近づく

――詩人が國葬に會葬者一万四千有餘――宏大なる紀念碑建立せらる……六
……自五十四頁至六十二頁

第六章

情之文豪

一

カーライル――渠は一石工の長子なり――渠か父母の嚴格――カラーイル憤然志を立てエデンバラに向ふ――八十哩の旅行に玉子と芋――渠正に廿七才一女性の師となる――女性の風采――女流の文士幾十の緣談を卻けて其希望を告白す――愛情なる言葉以上に爾を愛せん――先師私かにジエンを愛す――妾は斷して戀を弄ふものにあらす――渠女は竟に戀の軛か下に立ちたり――渠は遂に結婚の式を擧く――渠等か來客の文士――渠等は大英國中尤も寂漠たるクレグンパットックに移る――夫人は母を訪問せんとして出て行く――著述は尤も怖るへき業なり――サルトス、リゾルタスを某雜誌社に投して返却さる――渠か身邊困難具に到る――渠は憤然原稿を携へてロンドンに出立す――渠は出版損失一百五十磅を請求せらる――貧は再ひ渠等夫婦を寂漠の地に逐ふ――衣服哲學を一斷片となして雜誌社に投す――渠等の家庭に時ならぬ花を咲かす――一青年萬里の波濤を越へて來る――ノア洪水以來の大珍客――始めて佛國革命史の編纂に志す――エデンバラ大學教授の空位を充さんとして失敗す――渠は米國に渡りエマルソンに倚らんとす――熱血を灑ける原稿は一片の烟と化す――ミル原稿燒失賠償金二百磅を呈出す――佛國革命史脫稿す――精神の平和を希ふ婦人は文士に嫁する勿れ――渠等か結婚の當時の觀念――新婚旅行の護衛――渠等か結婚に入る最終の書翰――結婚に對する渠等の觀念――夫人カーライルの性質――デクソン令孃と夫人カーライルの談話――夫人カーライルか不道理的嫉妬――渠等の結婚なくんは世界は四人の不幸者を生せん――渠等か最後の勝利――夫人か永遠の告別――夫人カーライルの變死――女皇ヴイクトリア吊辭を送る――カーライル夫人の爲めに追悼錄を出版す――女皇ヴイクトリア謁見を受む――渠か八十歳の誕生日には親電雨の如くに來る――渠か遺骨はウエストミンスタル、アッベー入らす……自六十三頁至七十八頁

第七章

文豪と詩人

一

サミエル、デヨンソン――デヨンソン半生の生活――渠が裏面の觀念――博士と婦人――博士唯一の希望――博士とコルモンドレイー夫人――好色博士美人の間に驚く――二人の令孃博士を訪ふ――女流の文士と博士

——女優と博士の問答——博士と夜會——給仕女と博士の問答侯爵令嬢と博士——ボズウエルと博士——妾は博士の傍に着席せんとす——博士の慈善的好意——博士と新婚旅行——結婚生涯の困難を暗示す——博士の告白——博士私塾を開く——夫人が令嬢博士の容貌を批評す——ボズウエル夫人が博士評——平和なる博士の家庭……自七十九頁至八十八頁

第八章

失戀之詩人

一　ダンテー——詩人と美人ビアトリース——詩人の後妻ドナーテ——詩人先妻の追想……八十頁

二　ペトラーク——彼が理想の婦人……九十頁

三　シエクスペーア——トンシエクスペーア及び其婦人……九十一頁

四　ミルトン——ミルトン及び其婦人——妻は家を出て離婚論を著す——詩人が第二の夫人——詩人が第三の夫人——夫人ミルトンの希望……自九十一頁至九十二頁

五　コーレージ——サウゼー結婚指環を購求する能すして結婚式場より遁る……自九十三頁至九十四頁

第九章

失戀之文豪

一　スコツト——詩人とペルチエス令嬢——ペルチエス約に背きて他人に嫁す——詩人が初戀の追想——詩人初戀の老母と語る——奇遇は奇緣と變と佛國亡命婦人を娶る——夫人が容貌——失戀の詩人得意の人となる……自九十五頁至九十八頁

二　フイルヂング——亡妻紀念の著書顯はる……九十九頁

三　ラスキン——ラスキンが不幸の死——ラスキンの妻某畫工に私通す——齡十七歳佛國の少女を慕ふ——蘇國一美人に渠が詩篇を呈す——渠は生活調度總て無頓着なり——夫妻の心情隔離甚だしく竟に離婚となる——婦人の迷信詩人を困らす——迷信の婦人病死す……自百頁至百三頁

四　ヂツケンス——ヂツケンス幼時の困難——夫人ヂツケン私塾を開く——父は負債の爲め牢獄に繫がる——ヂツケンス中學に入る——雜誌通信助手となる——ヂケンス結婚の式を擧ぐ——一喜一憂渠が家に起る——ヂツケンスが理想の妻——キヤサリン、ヂツケンス家を去る自百三頁至百七頁

五　ウイリアム、サツカレー——サツカレー畫工たらんとして失敗す——素

六　と之れ渠は情の人なり――渠は其筆と其行爲に於て相反す――デツケンスが追悼文――渠は慈善家なり……自百七頁至百九頁

七　ロード、リツトン――リツトン及び其母――リツトン女文士バルワと結婚す――夫人所天を罵る――バルワ夫人の毒言……自百九頁至百十頁

八　ドライテン……百十一頁

ヤング……百十二頁

第十章　平和之詩人

一　ウオーズウオース――親友カルベルトの恩澤――コーレージと詩人――ハツチンソンを娶る――民法博士の學位を受く……自百十三頁至百十五頁

二　アルフレッド、テニソン――カーライルと喫烟の競爭をなす――詩人の容貌――セルウート嬢を娶る――詩人女皇に謁す――米詩人ロングフエロー及びナタナエル、ハウスルン詩人を訪問す……自百十五頁至百十九頁

三　ロバード、ブラウニング――詩人の幼稚教育――シエレーの愛讀者――渠は脚本に失敗す――年長なるハーレット婦人を娶る――夫人ブラウニング死して良人追悼詩を著す……自百二十頁至百廿一頁

四　レイ、ハント――渠は毛蕚を見て黄金なれかしと云ふ……百廿二頁

五　デ、クインシー……百廿三頁

六　ポツグ……百廿四頁

七　ケームル……百廿五頁

詩人と戀

關露香著

一　戀と自然

詩人と戀

美なるかな、二人の乙女戀に惱みて、海棠の雨に萎るゝが如き、眞なるかな、詩人之を得んとして却て之を失ひ、失ひて始めて之が眞粹を潑暉する、見よ、十九世紀英詩人中に於ても、其二三を除ては、殆ど全く失戀の詩人たるにあらずや、戀と名譽に養はるゝ詩人が、其食物を失ひて愈々之が貴重なる眞理を悟り、之に對して不朽の大文字を吾人に與へたるが如き、戀に對しては殆ど何人も判斷し難きものあるなり、然り戀は世の理に反す、之れ只不思議なり、之れ只不思議なる自然の力（フォース）なるなり、

戀と名譽は詩人の食物なり

戀は自然の力なり

戀ば何者か

そも戀は何者なるかと我に問ふは、何故に爾生れたるかと我に問ふに均しく、何故に爾花咲くかと花に問ふに均しく、何故に爾輝くかと太陽に問ふに均しく、我は只爾を愛するが故に爾を愛すなりと答ふるの外なきなり、暖き光線に浴してぞ百花繚爛たるにあらずや、戀の雨偷に濕り、戀の風綏に吹て、人の心は春めき渡るにあらずや、光線なくして花は咲き能はざるが如く、人は戀なくしては生き能はざるなり、然り戀は人の存在と共に存在したりき、戀は人の社會を組織するに當りて、滑に之を運轉せしむるの油とはなれり、若し人にして戀する心なかりせば、貴重なる人類には情てうものなく、社會は只曠漠たる荒野となり了らんのみ、戀の火天より降りて人心に點火せし以來、智惠は起り、希望は生し、扨は人心不滅のものとはなりぬ、

戀は人の生命なり

戀と社會

戀は天性の者なり

二　戀の平等主義

戀に貧富の別なし

戀は神的にして社會平等主義なるが故に、貧富を論せず、老若を別せず、言なく、理なく、均しく人類に贈與せらる、蓋し万物の光線に浴するが如し、諺に謂ふ、戀に上下の差別なしと、眞なるかな、上は王侯貴人より、下は田夫野人に至る迄、之を味ふの趣味一樣にして變化なければなり、戀の住居は金殿玉樓と言はず、破村茅屋と言はず、場所と時とを言はず何れの方面にも均しく公平に住居さるればなり、之を歌ふの聲は帝王と乞食とを論ぜざるなり、念ふに之れ無代價にして金錢を以て購ひ難く、權威を以て壓し難く、戀は戀を以て交換するの已むべからざればなり、されば戀は金錢を以て購ひ難し

戀に上下の差別なし

戀の王國

ブルータスの劍も戀を刺し能はざるべく、ソロモンの智も戀を制し能はざるべく、クロサスの富も戀を購ひ能はざるべし、

三　戀は曲物

秘密なる戀の鍵人心を開きて、渠が王國の住人となさば、渠は一の法律を設けず、渠は一の劍を携へず、帝王と乞食とを撰はず、智者と

戀の變化

愚者とを區別せず、同一席に列せしめて更に不平の聲を漏さしめず、何れも滿足の意を表はさしめて、渠が支配の下に就かしむ亦奇なりとせんか、亦怪也と言はんか、見よ、智は盲して愚となり、大人變して小兒となり、二八の乙女老翁を戀ひ、蠻族の子女智者に嫁すに非ずや、

四　戀の盲目

戀は偏頗なる明盲目なり

戀は曲物なると同時に亦盲目なり、之れ戀の目は互に其の美點にのみに注がれて敢て他を顧みるの暇あらざればなり、之をば盲目なりとせば蓋し戀は偏頗なる明盲目なりと言はさる可からず、世は人の欠點のみを見ると雖も、戀は人の美點のみを見る也、否な戀の目には欠點も美點と變して顯れ來るなり、其の手は美はしき薔薇花に觸れて、巧に其刺を避くるの盲目なるなり、念ふに之れ戀の目は互に戀の目を交換して、敢て他を見るの必要生せざるが故ならんか、

五　戀と勞働

戀の力

美は物の極に發す

『戀は勞働の何物たるを知らし』とは伊國の諺なり、宜なり、戀の爲に盡す働は、其苦の何たるを知らず、常に快味を覺へて、終に之を成し遂くるにあらずや、雨を厭はず、風を恐れず、而も千里の路を遠しとせざるものは戀なり、九十九夜通ひて、雪の爲に凍死を遂けしめたるも戀の力ならずや、打鳴らす夕鐘の火を抱て、其の戀人の死を救ひたるも戀の力ならずや、

六　戀の美

美は物の極に輝くとは我の論なり、夕陽將に西山に搗かんとして、天涯紅を發す、之れ美ならずや、人將に死なんとして言ふ所、亦美ならずや、戀、迫害に遇ひて將に破壞せんとす、美、愛に露はるゝにあらずや、村雨の過ぎ行くあとの花の香ぞ、いや芳ばしからずや、薔薇花に宿りて香を籠むる玉露、將に一吹の微風に碎けんとす、豈美ならずや、眞情を籠むる一滴の涙、將に戀人の眼を放れんとす、美觀何ぞ

スコツト湖上の佳人に歌へり

希望

之に比するものあらんや、スコツト『湖上の佳人』に歌ひて言はずや、

『薔薇まさに蕾を破らんとす、彌美しからずや、
希望將に恐怖を脱せんとす、彌閃かずや、
薔薇朝露に洗はれて、彌々美あらずや、
戀涙に包まれて彌々愛らしからずや』

戀の側面

七　戀の表裏

戀に両面あり一面は蜜を含み、一面は毒を含む、恰も蜂に蜜ありて毒刺あるが如し、之れ世に善惡の存在すると均しく、物に利害の伴ふと均しく、性に陰陽の別あると均しく、亦之れ勢の免かれ能はざる所なるべし、蓋し其の一面の美を嘗めたる者は、心身共に健全にして永遠の幸福を得ると雖も、一度其の毒刺に觸れたる者は、終世不幸に陷りて遂に其身を亡すに到る、之れ戀の罪にあらずして即ち其の人の罪なり、

八　戀の禁物

戀の錆

戀の樹木

戀の輒

戀の禁物は疑念なり、疑念は戀の錆なり、如何に正宗の名刀たりと雖も、一度之に錆を生せば、忽ち其の鋭を失するにあらずや、故に戀の宮殿に在つては、寸毫の疑心入るを禁せり、完全なる戀は恰も水晶の透明なるが如く、一點の塵だも容れず、疑心一度戀に生せば、血液にバチルスの發生したると均しく、最早健全なる體格を備へたる者とは言へど、破鏡元に歸らずとか云ふ、一度破れたるの戀は、斷して初戀の如く、甘味なる者にあらざるべし、されば戀に錆の生せざらん事を欲せば、豫め涙を以て之を拭ひ取るべし、涙は破壞せんとする戀を繋ぎ止むるの鐵鎖なり、戀の樹木は涙を以て陪養せらるべけれどなり、

九　戀の重荷

名譽は水泡の如く消え、富は鳥の如く飛び、希望は花の如く凋むと雖も、戀の目方は重くして動かし難し、詩人言はずや、『噫如何に爾の輒の重きことぞや、嗚呼如何に爾の箭失の酷なることぞや』と重き輒を

懸の暴君

西行法師

懸の遠景

懸けられたる牛馬よ、何故に爾等歩まざるや、戀の暴君は鐵鞭を擧げて、今哉爾等を打たんとす!!!長髪百人力のサムソンよ、埃及を征伐したるシーザーよ、世界を併呑したるナポレオンよ、敢て問ふ、爾等の力、爾等の劍、爾等の彈丸は、果して能く戀の王國を略取したるや否や、脫俗の僧西行法師よ、墨染の貴き法衣の袖果して能く煩惱の犬を追へりや否や、一少女イアンセの拒絶に逢ひて、故國を出奔したるバイロンよ、伊國山色の美は果して能く爾の心を慰め得たるや否や、

十　戀の完結

戀は一先づ結婚を以て完結すと雖も、之を永續せしめ、之を陪養して枯死せしめざらんには、蓋し容易の業にあらざるべし、見よ、理論は實際に徵して時々齟齬するが如く、理想の戀は結婚に到りて屢々敗を招くにあらずや、理想を描ける戀の油繪は、遠景に美を表はして、接近に粗雜の「アラ」を見するにあらずや、豈獨り戀のみならんや、凡そ

何事にても希望のうちに歩める間は、却て快樂の滋味を存すと雖も、一度其意を滿すに於ては忽ち不平の聲を洩すに非ずや、花の蕾に美は含めども、滿開は既に其落花を吊すに非ずや、嗚呼未婚の青年男女よ、理想の戀を夢むる佳人才子よ、蛺蝶飜々として花間に戲れて、暫時夢むる爾等の嬌態の如何に美なることぞや、

第貳章

詩人

一　詩人と戀

"Chamelon are feed in air and light:
Poet's food are love and fame."——*Shelley*

詩人は戀の天使なり、戀の魔術師なり、詩歌に戀の美を謳歌して反對に之に苦めらるゝものは詩人なり、口に戀を味ひて後之が消化に苦しむ者は詩人なり、蓋し之れ詩人が理想の戀に夢みて、實地に之が應用を覓むればなり、シエーキスピアは言はずや、

"Never durst poet touch pen to write
Untill his ink were templed with love's sighs."

「詩人は其墨の悲哀の戀に動くに非らずんば
敢て其筆を染めざるべし」と、

詩人は戀の魔術師なり

戀の食物は不消化なり

戀に對するシエーキスピアの言

天才の士と失戀

詩人失戀の美

狂氣なくんば詩人たらじ

天才の士一度其戀を失せば、精神狂して筆端の動くこと、恰も疾風砂を捲くの慨あり、如何に其の聲の大なるかよ、春園蛺蝶花の香に眠る、如何に其容姿の靜なることよ、詩人平和なる戀を得て眠る、如何に其筆の靜肅なることよ、狂風一陣花を散らす、翻々たる胡蝶高く空中に倒飛して、其狂態を演ずることの如何に美なることかよ、詩人一度戀を失す、滔々たる詩想高く天に冲して、思想の光線裏に隱る、蓋しシエレーの所謂雲雀を詠ずるに均し、

二　詩人と家庭

"Born of deep Pain isthe poet's art,
And the song that alone is true."——*Kerner*

プラトー言はずや、『何人と雖も狂氣なくんば絶大の詩人たる能はず』"No man could be a great poet without some mixture of madness." と、然り極端に逸するは詩人の性なり、感情に狂するは詩人の常態なり、情の軌道

詩人は其家庭を暴らす

詩人は靈の住人なり

詩人と火事

詩人は殘忍なる主人なり

を逸して其家庭を暴すものは詩人なり、古今東西に別なく、詩人文豪と呼ばるゝ家庭に、スヰート、ホームの存在したる事殆ど稀なり、蓋し詩人は靈の住人にして、其妻は肉の追求者なればなり、詩人の頭腦彌々發達すれば、其家族は彌々其食に窮ずるなり、『我は我家族の幸福を懇望す、然れども我をして些細なる家事の奴隷たらしむるは、我の忍ぶ能はざる所なり』とはモンテスキューの言なり、或日渠は其書齋にあつて讀書に耽りけるとき家僕狼狽「火事」なりと告ぐ、渠曰く、『火事は我妻の司る所、敢て我の關する所にあらず』と平然として猶其章を追へりとか云ふ、蓋し之れ詩人の生活としては例外なりと雖も、極端に逸することの詩人の多くは、殆ど之に類することの數多ありて存す、

三　詩人と結婚

結婚は人倫の大道なり、結婚は神聖なり、とは詩人の常に口にする所なりと雖も、詩人はと冷酷なる夫なく、詩人はと殘忍なる主人なし、

詩人の行は惡魔なり

處女と詩人

一甕に二猫

詩人は危險なり

ゴールドスミス謂く、『詩人の語る所は天使なり、然れども詩人の行ふ所は惡魔なり』と、夫人バイロン書齋の戸を敲いて曰く、『用あり、爾の勉强を妨げざるや』室内のバイロン大聲を發して答ふ、『馬鹿者めッ』と噫何ぞ夫れ酷なるや、

詩人に嫁したる婦人にして、完全なる家庭の快樂を得たるもの、古今を通して殆ど一人も之れおるなしと言ふも敢て過言にあらざるべし、學才ある妙齡の處女にして、肉を追窮する目的を以て詩人文士に嫁せんとするは、之れ大なる了見違なるべし、詩人の妻たるものは、感情極めて激しき婦人か、或は亦無學文盲の愚物たるべし、腦の人に腦の婦人の嫁するは、一甕に二猫を入れ置くと均しく、殆ど喧々噪々の聲絶ゆ間なるあらざればなり、

四　詩人と婦人

詩人は火なり、水なり、必要之に過ぐるものなしと雖も、危險亦之

より大なるものなし、試に之に接せんか其身燒かれ、試に之に近かんか、其身溺る、幾分の學才を有する婦人最も危險なり、彼等は『怖いもの見たさ』の諺に漏れず、常に之れに接近せんとする傾向ありて存す、詩人歌へり、婦人は蘆葦の如し、暴風に耐ゆべけれども、戀の微風に折れ易しと、宜なり感覺的婦人の性質は、弄ぶ詩人が理想の戀に感應して、折れ易く、過り易ければ、妙齡の處女は殊に注意を要すべきなり、見よ戀なきの詩人は、羽翼なき天使にあらずや、されば戀なき詩人に戀の羽根を献ず、忽ち取て理想の空天に沖し、敢て下界の食を顧みざれば、之を献じたる婦人は忽ち其食に窮するなり、

第三章
獨身の詩人

擬古詩の全盛を極めたりし十八世紀中の詩王ポープは、Withen Bugh アレキザンドル、ポープ

となん言へる令嬢の愛に溺れたりき、ポープ生れて矮少駝背、剩へ全身いたく細りて、身の丈け僅に四尺、極めて見にくき男なりしかど、詩人に對する嬢の愛情は至て大きく至て深かりければ、令嬢の不利を念ひて両人の交通を遮斷せんとしたる後見人は、竟に意を決して嬢を遠く大陸に移したるが、母樹を放れたる一輪の薔薇花は、採碎かれんとして愈々其香を放つが如く、嬢が愛情は此等の迫害に遇ひて、彌々增々其度を強め、遂に戀の犧牲となつて自から其身を亡ぼしたりきと、

マルサー、ブロント(Martha Blount)なる一婦人は詩人と深き交際ありたれども、後年に至りてブロントの詩人に對する愛情は甚く冷かとは

アロントと詩人

渠未だ死せずや

憂鬱な病の詩人クーパー

なりぬ、ブロント或日使者を遣はし詩人の安否を訪問せしめたるに、使者は歸りて詩人の健康を告げたるに、婦人は驚き叫びて『渠未だ死せずや』と歎息したりき、蓋し詩人の世を去りたる後は、渠が財産の全部は擧げてブロントに歸するの約調ひ居りたればなり、猶此外に Lady Mary Worthy Montagu なるものと面白き戀の話の存すれども、余りに滑稽しみて詩人の價値を隕するの恐れあれば言はず、

四　ウイリアム、クーパー

十八世紀の擬古檢束を脱して、自由創新の新詩體を起したるクーパーは、渠が從姉妹たる Theodora Jane Cowper と互に愛を交換して結婚せんとしたるが、親戚の間柄にして婚儀を結ぶはジエンの父の欲せざる所となりて、竟に結婚を見るに到らざりければ、小膽多病悒鬱なる渠は、更に憂鬱を加へて煩悶苦惱したりき、然れども渠は詩人の家に滯留して渠が憂鬱に意を用ひたれば、渠が憂鬱の幾分は殺がれたるも、詩人の眼底には常に涙の乾くひまあらざりき、Delia の名の下に作りたる love poems は總てジエンが厚情に報ひたるものなりと云ふ、

純然たる土帝の宮庭

クーパアの家は德義ある婦人を以て純然たる Seraglio (一夫多妻たる土帝の宮庭)を作りたり、一見みぐるしき金巾の夜帽 (Night cap) を冠り居れる渠は、何が故に斯の如き道義ある婦人の同情を惹けるか、恐くは之れ渠が軟弱多病にして、何事も婦人の力を要すると同時に、女性に (flatter) するの才に長けたる渠が巧に此等を操れるに由らずんばあらず、蓋し女性は己れが愛するものゝ爲に可成多くの働きをなすを以て唯一の樂みとなせばなり、

牧師の妻とクーパー

渠が『詩の女神』たりし一牧師の妻アンウヰン (Unwin) 夫人は、一種の憂鬱を醸して日夜懊惱として閉居し居れる渠を誘ひて己が家に宿らせ、種々なる面白き話をなして渠が憂鬱を散せんとに務めき、其后 Lady Austin なるものアンウヰン夫人に次きて詩人を慰めたりしかども、婦人の愛に對するよりも詩人の愛は比較的冷淡なりしかば、倦怠の念漸く

生して婦人は竟に詩人と交を絶つに到りき、

三　ヂエムス、タムソン、

『四季の歌』を著して詩名ポープを凌がんとしたるタムソンは其齢正に三十に充つるも至て貧困にして、『アコンダ』の如く崇拜したりきレヂー、ヤングと結婚するの費なく、戀しきヤングは某海軍將官に嫁せんとするも、之を傍觀するの止むなきに至て、渠は怒を呑んで終世獨身に暮したりきと謂ふ、

クムソン戀人を奪はれて傍觀す

四　ジョン、キーツ

『我が生涯は水に書かれり』と歎きて、其死を豫想したるキーツは、浮世の空氣を呼吸する十六ヶ年にして逝けり、渠未た學童たりし頃は、婦人を心人類の最上級に置きて、純然たる女神の如くに崇め居りたりしかども Miss Browne と相知りてより、渠が說は忽ち一變したりき、

キツー戀人を其兄に呈せんとす

或時渠は其兄弟（ブラザー）に書を送りて言ひけるとあり、曰く『我は Miss Browne を爾に與えんか、彼女は中肉中背にして、其丈けは殆と我に均し、彼女は何人に對しても慈悲の心を欠けり、彼女は可成よく見られん爲に常に其髮を調へり、彼女の鼻は至て美しけれども、少しく痛みあるが如く見ゆ、彼女の口は善き時もあり亦惡き時もあり、彼女の側面觀は其全貌よりも僅かに良しきかとも思へども、只頰骨の露はれ居らざるのみにして格別甘味あるものにあらず、彼女の舉動は女らしき所あれども、兩手は至て惡く足は慈く可き程に大なり』と、

斯の如く渠は其戀人に對して殆と門外漢の如き觀念を有したるが、漸次に其交情の温りゆきて、詩人は竟に其心を奪はれん程に深くなりつ、遂に結婚の約をなすに至りぬ、然れども戀の仕事（ラブ、ー、キング）は詩人が幸福なる所業に非ざるものと見えて、常に婦人の渠に對する動作を非難したりきと言ふ、詩人の健康漸く衰へ行きて死期の正に近寄らんとするや、渠は冬を過さんとて大陸南部に漫遊を試みんため、Miss Browne と永遠

ラーブメーキングはキーツが幸福なる仕事に非らず

に其別を告げたり、

婦人社會の大立者ロージエルス肘鐵砲を喰ふ

五　サミユル、ロージエルス、

婦人社會の大立者にして著しく女性を好める渠は、晩年に及んで甚く其の帶妻せざることを悔めり、詩人は世界に於て最も美人なりと思へる一少女と將に結婚の約を結ばんとしけることあり、或夜のことなりき詩人は舞踊會に於て彼女に會合しけるとき、渠の傍に來りたる彼女は渠に告げて曰く『妾は明日 Worthing に到るべし、君も共に來らざるや』と問ひけるに、詩人の返辭は至て淡泊なりしかば、彼女は甚く其感情を害ひて、いつしか之が返報をなさんとて其の機會を待ちけり、其后數ケ月を經て詩人は Ranelagh に於て今ぞ入り來れる多人數に何人も其眼を注ぎいたるを見て、均しく彼等を眺め居たるに、其中央に立てる一少女の新郎と思しき人の手をとりつゝ、座に着ける其容姿の如何にも美しければ、思はず前に進みて彼女を見詰けるに何ぞ斗らん之れ詩人の慕へる婦人ならんとは！あいた口の塞がらざりし渠に最も冷淡なる口調もて彼女は言へりき、"You never come to Worthing『ウオルシングには二度とお出遊ばすな』と、

ゴールドスミスと仕立屋の娘

六　ゴールド、スミス、

荒村行(Deserted Village)の著者ゴールドスミスは Miss Mary Horneck と朋友たりしが sweetheart(戀人)にてもあらざりき、渠は一度も結婚せんとしたりしこともなければ亦エングージ(結婚定約)したることもなかりき、渠は嘗て人の勸めによりて仕立屋の女と、無理やりに結婚せざる可からざる場合となりたるが、辛くも之が虎口を免かれて遂に終世獨身にて暮したりきと

第四章
獨身の文豪

アービング片身の墨書

一

ワシントン、アービング、

スケッチ、ブックの著者アービングは、マチルダ、ホフマン(Matilda Hoffman)とて、句ふは花の姿なる當時十七歳の處女と、結婚の約調ひしかど、憫むべしマチルダは肺病に襲はれて、遂に黄泉の客となりければ、渠が失望落膽は遣る瀬なく、せめてもの思ひ出に、嬢が所持したりしバイブルをば、壹は行李に藏め、夜は枕邊に置きつゝこよなき漫遊の友とはしけり、其後三十年間は何人も恐れて結婚を勧むるものなかりき程に、渠が追悼の情は禁じ能はざりきと云ふ、

漫遊の途次渠はマチルダの父ホフマンを訪へることありき、ホフマンは机の引出しより一個の縫箔を持ち來り、アービングに示して之れマチルダの作なりと云ふや、快談に時の過ぐるを知らざりし渠は、忽ち顔色を變じ默して語らず倉卒辭してたちと云ふ、「ブレース、ブリッヂ、ホール」Brace Bridge Hall に書きける一節は正に之れマチルダが追悼に献したるに非ずや、曰く、

追悼句

"I have loved as I never again shall love in the world;"

"I have been loved as I never again shall be loved."

「我は此世にて斷して再び愛せざるが如くに愛したりき」

「我は斷して再び愛されまじきが如くに愛せられき」

亦渠がノートブック中に記して曰く、

"She died in the beauty of her youth, and in my memory she will ever be young and beautiful."

「彼女は青春の美を着けて逝けり、故に我が記憶裏には彼女は永久若くして美なるべし」と

アービングとバイロン

蓋し之れ狂戀の詩人バイロンが、一少女イアンセーの美を望みたる

"Ah! mayst thou ever be what now thou art,

Nor unbeseen the promise of thy spring."

「噫、爾が姿ぞ今ある如く、とこしなへにあれかし、亦三五の春の望を空うすること勿れ』

と言ふが如き趣きありて存す、

二　デビット、ユトーム、

ヒーム貴女に拒まる

蘇都エデンバラに生れ幼きより讀書に耽り長じて哲學者となり、歴史家となり、散文家となりたるデビット、ユームは、嘗て一貴女と結婚の約をなさんと申出でゝ拒まれ、憤慨の餘り佛都パリーに趣きたるが、渠を拒絶したる婦人は粗暴なる前言を悔ひて渠が友人に乞ひ、其の心を變じて再び元の鞘に収められんことを乞ひけるに、渠は最も簡短に答へて言へり、"So have I" "So have I" 「我も然なり」、「我も然なり」、と

『我も然なり』

て獨身の生涯を送りたりきと謂ふ、

何れの方面より觀察するも斷じて Handsome man 優男と見えざりき渠は、如何に巧なる技術やありけん、女性の交際裏には最も持てたる人にてありき、殊に英國に於けるよりも佛國に於ては渠が辯舌は甚く揚りて頗る優待せられにき、

ヒーム佛都の美人大宴會に招ぜる

渠は佛都パリーに滞在せし或夜 Bouffers 伯爵夫人の紹介によりて、今を盛りと咲き揃へるパリー美人の大宴會に導かれたることありけるが、恰も二人の奴隷間に座りて美人を見物する土帝の如く、歓待至らさるはなく、殆んど煙に捲かれて何をなすべきかを知る能はざりし渠は、只己れの腹を打つことの外何事もなさゞりきと云ふ、Bouffers 夫人との交情はヒームの死期近くに及んでも猶繼續したりきと、ヒームの同夫人に送りたる書簡の一片に「人生の行路難に於て常に我をして光明裏に導き出したるは爾なり」との言あるを見れば、渠は伯爵夫人との交際に於て如何にインテレストを置きしかを知るに餘りあるなり、

三　チャルス、ラム

ラム失戀して入院す

ラムの姉其の母を殺す

「沙翁劇の筋書」（アーサー・ラムの、シェキスピアー）の著者として我が學生間に知らるゝラムは、千七百九十五年精神に異常なる所ありて、六週間養生院に入院したりき、直接の原因は失戀にして、渠が詩歌に歌へるアンナは即ち渠が情人なりき、渠は言へり、『自由に語り合へりし幸福なる日は再び我を見舞はざるべし』と愛婦の名は Simons と呼べり、其后渠は結婚せんかと幾度か其心を惑せしかど、偶々姉なるメリーの發狂して其の母を殺し、猶幾度か渠を殺さんと企てし大慘事に逢遇して渠は、此可憐なる姉を看護せん爲めに終身獨身の生涯を送るべしと決心したり、蓋しラムは己を殺さんとしたる姉の怨を捨てゝ、却て之が看護に餘念なかりき一片の厚情は、如何に發狂したりき姉なりと雖も、病の間歇中は涙を流して深く渠が恩を謝したりきと云ふ、

四　エドワード、ギッボン、

史論の貴寶として永遠滅せざる『羅馬衰亡史』の著者ギッボンは、新

改宗の結果キッボン瑞西に遂はる

キッボンと牧師の娘

文明史の著者結婚の文明に浴せず

教より舊教に改宗したりし爲めに、甚く父の勘氣を蒙りて瑞西なるローサーン(Lausanne)に遂はれ、そこなる新教の一牧師の家に屬すること五ケ年、其娘なる Susanna Curchod を意中の人となして樂しみけり、スウサナは快活なる談話に巧に、意志潔白にして行爲正しく、亦相當なる學識ありて渠が僧老を契るに敢て愧づる所なかりしかど、何故か父は之を拒みて許さゞりければ、已むなく両親の許を得て彼女の父と同居したりき、渠は英國に歸りたる後にてスウサナは、佛國なる名高き銀行家チックル氏に嫁したれば、彼女に對しては永くプラトー的戀愛を持續して、終生妻を娶らず獨身の生涯を送りたりきと、

五　ヘンリー、トーマス、バックル、

「文明史」の著者にして結婚の文明的恩澤に浴せざりしヘンリー、トーマス、バックルは、富祐なる家に生れ、充分なる教育を受け、贅澤なる生活をなしたれとも、愛戀の點に於ては見事に失敗したり、渠は

結婚日數三千

常に言へり、凡そ妻を迎へ一家を治めんとならば少くとも一年三千ポンドを要すと、然り渠は其持論をば實行し得べかりしかども、實行すべき目的物を得る能はざりしを如何せん、渠が最始の情人は渠の從姉妹にして渠の外猶他に一人の競爭者ありたりき、其競爭者に對して渠は決鬪を申込める程に熱心なりしが、其意中の人なりと念ひたりし人は意中の人に非らずして、却て渠が敵たりし人に結婚の約を結び、渠は生涯拭ふ可からざる恥辱をうけたり、其後彼は他の從姉妹を戀ひて之を娶らんとしたりしが、其両親の反抗に遇ひて果さず、再び戀に失敗して生涯獨身と決心したりぬ、

第五章

「狂戀の詩人」

一　シェレー

(Percy Bysshe Shelley)

詩人が初戀人

『狂漢シェレー』なる綽號の下にイートン校を逐はれ、激烈なる無神論を唱道して、親友ホッグと共にオックスフォルト大學を放逐されたる、男爵チモシー、シェレーの嫡男ピルシー、ビッシエー、シェレーは、早感早熟、十六七歳にして既に其從妹に當れるハリエット、クローブと結婚の約をは結びたりき、渠の言ふ所によればハリエットはラファエルの寫せる美人畫か、或は亦シェキスペーアが其詩中に描ける美人に彷彿として、至て快活に而も學才に長けたる處女なりきと、

シェレーが黄金時代

春の夜の夢にもいや劣るべき、渠が三十ケ年の短生活中の黄金時代(ゴールデンエージ)は、實に渠シェレーとハリエットとの結婚約束(エンゲージメント)中に存在したりき、彼女に送れる書中には宗教哲學上に於ける渠が意見を吐露して頻りに彼

詩人宗教觀と破約

女が同意を覓めたれども、歩一歩無神論に傾きつゝある渠が宗教觀は、ハリエット及び其両親をして竟に破約するの已むなきに至らしめたるぞ是非なけれ、

失戀の極自殺せんとす

朔風一陣渠が樂園に吹き荒んで落花狼籍たるが如く、破約と聞きたる渠は狂人の彌狂へるが如く、閭々たるクリスマスの夜降りしきる大雪を犯して獨り墓地をさ迷ひたりき、何が爲に渠は斯の如き狂態を演したるかは吾人之を知るに苦むと雖も、冬期休課に際して兩親の許より其學校の友に送れる書中に記されたるを見れば蓋し之を推察するに足れり、『焔々』として燃え上る情火我を焦がして。我を支配せる意志は之れと共に燒かれたり、我は恰も大海に漂ふ一葉の孤舟にして而も舵を失へるに似たり、……自殺果して惡しきか、昨夜我は裝藥したる短銃と共に眠れり、眠醒めて我は激藥を手にしたり、されど我は猶死に切れざりき』と、惆むべし渠は其貴重なる生命をば戀の祭壇に供せんとせり、悲むべし渠は失望失戀の底知れぬ千尋の谷に蹴おとされて、

詩人が第二の戀人

最早光明裏に棲息するカメロンの如くなり能はざりき、

閃めく劍の刃を笑つて看過する渠は、こはす婦人一滴の涙に敵し難く、渠が少妹の學校朋輩にして齡正に二八、梅花綻んとして其香幽しく、うす紅の頰に宿る一滴の涙は、先づ渠が少妹を動かして次にシェレーの同情を買へり、處女の名はハリエット、ウエスブルーク (Harriet westbrook) とて父は下賤なるコーヒー店の主人たりしかども至て富裕なる身分にてありき、渠は少妹エリサベスを訪へる毎に彼女に過へり、如何なる理由の存するかは知るを得へからしが、ウエストブルークは其の家庭に於ては懊々として樂しまず、學校に於ては虐待と壓制に苦められて、自ら其身を亡さんとの覺悟を極めたりと其少妹より聞きたる渠は、其の從妹を慕へる心の未だ全く冷めざるにも係らず、義俠に富める渠が性行は一時に此の危險なる火中に投せんとしてためらへるに、頻りに彼女が薄命を嘶ち、渠に助けを覓むる急にして、最早一刻も其困苦の忍ふ可からざるを述べ、血涙以て渠が足下に涕き伏し其の助を

戀人詩人が膝下に伏して助けを乞ふ

百難を排して戀人を救ふ

乞ふに對し、渠は百難を排し猛然立て彼女を救はんとしたりき、之れ蓋し壓制を蛇蝎視する渠は、柔和なる一少女が壓制束縛の犠牲たらんとするを傍觀するに忍ふ能はざる所なりき、渠はウエストブルークを愛するよりも壓制を惡むの情熾なるが爲に、之と戰はんとしては社會の毀譽も、朋友の嘲笑も、父母の怒りも、己が一身の災厄も聊か顧るの暇あらずして、彼女が請を容れて共に逃走すべしと決心したるなり、

貴族の嫡子と一珈琲店の娘

飜つて渠が身事を顧みれば、渠はハリエット、グローブの戀を失つてより、非結婚論者となりて終生獨身を決心したるなり、加之渠は貴族の嫡子にして彼女は一珈琲店の娘なり、其の差は雲と泥、其の輕重は提燈に鐘の如き觀ありしとは雖も、可憐なる一少女が壓制の斷頭臺に上りたるを見ては、俠骨なる渠の天性は斷して之を傍觀し能はざりしなり、

時は之れ九月秋の始め、漂ふ雲に雁鳴き渡りて、枯れ行く野原に蟲すだく頃、肌寒く吹く秋風に振りかゝる長髪を吹き流して、行末の嵐は何時起るべきかは夢にも知らざる白顏の美少年シエレー（時に十九歳）は、芳紀正に二八、春花燃えんとするハリエット、ウエストブルークを携へて蘇國エデンバラに走り、同國の儀式にならひて結婚の式を舉けぬ、時に之れ一千八百十一年八月廿八日にてありき、

シエレー結婚の式を舉ぐ父怒て糧食を絶つ

斯くと聞きたる父なるテモシー、シエレーの怒り激しく、一ケ年二百磅を給し居れる糧食を絶ちければ、エデンバラの客舍に佛小說の飜譯に餘念なかりし渠は、忽ちパンに究して此所を去り、ヨークに移りて伯父なるビルフオルド（Pilford）に仲裁を乞ひ、漸く規定の給供金二百磅を得ると同時に、花嫁なる父よりも亦同金額を給與されて暫時は爰に彼等の假屋を定めたり、聽かて斷金の友ホッグの來るあり、ウエストブルークの姉エリザの來るありて、渠が家庭は一時春野花咲き林間鳥囀づるの觀ありしが、何事かシエレーの意に充たさることやありけむ、渠は其妻と其姉エリザを伴ひ獨りホッグを殘し、突然湖國の一邑ケスウヰック（Keswick）に向て去れり、

渠が家庭一時の樂園

湖畔の詩人に逢ふ

ゴドウインと交情を結ぶ

新聞記者を救はんとして愛蘭土に走る

當時英國の文士の多くは、此の自然の風景に富めるケスウ井ックに來りて住むもの多かりき、然れども渠の爰に來りたる頃にはコレッヂ既に去りしてあらず、唯ウオーズウオースとサウゼーのみ止りて相知ることを得たりき、乍去渠が頻りに相見んことを欲したりき政治的正義 (Political Justice) の著者ウイリアム、ゴドウ井ンとの文通は始めて爰に開かれたり、渠はゴドウ井ンに屢々書を送りて哲學上政治上の意見を聞き、且つ、將來渠が師父となり、忠告者となり、朋友たらんことを申送れるに渠は快よく之を承諾したり、

所詮渠はウオーズウオーズが如き平和の詩人にてあらざりしなり、ケスウ井ックの風景に醉ひて眠る者にあらざりしなり、時之一千八百十二年八月愛蘭土の一新聞記者キアストルリー公 (Lord Castlereagh) を誹謗したる演說をなしたりとて十八ケ月の禁錮に處せられたると聞くや、壓制を惡める渠が情火一時に燃え上り、憤然一詩を送り大に同情を表はし、如何にもして彼を救はんとして、其の師傅とも仰げるゴドウ井ンの忠言をも斷然却け、"Address to the Irish people" 愛蘭土人に激すてう一片の草稿を携へ、其妻及びエリザーを隨へ、首都ダブリンに着し(Lower Sackbille) ロワー、サックビル街七番地に其居を定め、忽ち激文を印刷して普く之を配布せり、其后渠はノールスウエルスなるナントギルトに移り更にラインマウスに轉し、亦トレマドックの近郊タンルアートに趣き翌年五月英國ロンドンに歸り翌六月一子イヤン・セーは生れたり、

一子イヤンセー生子

妻に對する熱情漸く冷却す

一千八百十四年シエレーは廿一歳其妻ウエストブルークは漸く十八歳となりぬ、今や其妻に對する渠が熱情は漸く冷却し始めたり、蓋しシエレーか理想の妻は大なる智力を有し深き情交あるの婦人にしてありき、渠は其友ピーコックに送りて曰く『我は我が子を愛するや切なり、我は渠を抱きて廊下を歩き、我が作りし子守歌を連唱して樂めり、然れども我が妻には哲學上の觀念なく亦詩學上の趣味なし、彼女は單に貴重なる一動物たるのみ、何ぞ我を樂ましむるの理あらんや、其姉エ

妻は貴重なる一動物

戀の牢獄に投ず

シエイレーか第二の戀人

ワザは何故に我と同居するや、我は甚く彼女の同居するを惡めり、彼等は我をして借金を作らしむるの外何事もなし能はざるなり』と、今やシエレーが其妻に對する情愛は鐵の如く冷くなれり、百難を排して壓制の軛を脱せしめたる渠は、其の妻をして戀の牢獄に投じて偉大の苦痛を與へしめたり、されば戀の初火は彼等の家庭に消え失せて慘憺たる闇の夜とはなりけり、妻は其子イヤンセーを携へて「バス」に走れり、殘されたるシエレーは負債の囚人となりて其債鬼と戰へり、渠は一條の血路を開かんが爲に其師コドウキンの許に趣き、三百磅借り入れの方法に就て熟議を凝らせり、

ゴドウヰンが先妻の連れ子に、メリー、ゴドウヰンとて當年十七歳の令嬢ありけり、顏色蒼白、智力長け、精神敏く、物事に熱し易く亦感し易く鬱々として常に樂しまざるの趣きあり、彼女は其母の葬れたるセント、パンクラス (St. Pancras) の墓場に趣き、其所なる樹蔭に讀書することをば此上もなき樂みとはしてけり、或日シエレーの此所を通

三個の人影ゴドウヰン家を去る

旅費盡きて金時計を賣る

過するありて思はず彼女に逢遇してより、互に其不幸を語り合ひて竟に永遠相離れまじと固く契を立てたり、戀に惱めるメリーは其の切なる情をば彼女が父母に明かせり、シエレーの友人なる小説家ピーコックは、双方の爲ならじと念ひて頻りに思ひ止まるべしと忠告したれども、一途に思ひ込みたる彼等はイツカナ聞き入るべくも見へざりき、

時は之れ一千八百十四年七月廿八日の朝まだき、影黑みゆく三個の人影はゴドウヰンの家を離れたり、何ぞ圖らん之れシエレーとメリー及び其異母妹なるジエン、クレールモントなんとは！出奔すべしとは夢にだも知らざりしゴドウヰン夫妻は事の案外なるに打ち驚きたれども、何れの方面に向て遁走せしかは知り難ければ、總て事の成行に任せて打ち捨てれけり、何所にも目指すあてなき三人の大陸漫遊者は六週間にして旅費盡き茫然としてロンドンに歸り來れり、負債に苦められたる渠は彌々增々之に惱まされたり、渠は其の所持せる金時計と其鎖を賣り拂ひて漸く其口を濕せり、渠はハリエット及び其子供等を養ふ

遺産三十万磅

可き義務を有するのみならず、亦渠とメリーを支え得べき財源なかるべからず、然れども何事にも無頓着なる渠シエレーが頭腦には聊か此等の考案の存在せざりきや明けし、一千八百十五年六月六日男爵シエレーは二十萬磅の遺産を殘して逝けり、故に渠が一ケ年の收入は一千磅となりければ其内二百磅をば年々ハリエットと及び其二人の子供等に割讓したり、此の不意なる收入に依りて乾けるシエレーの懷は漸く祐に、ウインドソルの公園近く渠とメリーは一家を購いて先づ爰に住居を定めたり、

始てバイロンと相會す

シエレーの戀に一處女其身を亡す

一千八百十六年シエレー及びメリー、ゴドウヰンはジエンクルールモントを伴ひて再びピヲブア湖邊に遊び、爰に始めてローレルド、バイロンと相會す、九月渠は再びロンドンに歸りて當時知名の文士等と相往來す、十月メリーの異母姉妹なるフアンニー、イムレーはシエレーに對する言ひ難き情の憂鬱に堪えず、スワンシーの近傍に於て阿片を喫して其身を亡しぬ、薄命なるハリエット、シエレーは良人に見棄られ、世を墓なみ、プロムトンなるクイン街に詫び住ひをなしたりしが、十一月九日終に意を決してソルペンタン河に其身を投じて溺れぬ、噫何ぞ夫れ慘なるかな、斯くと聞きたるシエレーは狂氣の如く彼等の死を悲めり、堪え難き憂鬱の情を慰めんとて渠はレー、ハントに逢ひキーツ及びスミス兄弟に會して稍々其懊惱を散せしめたり。

シエレーの夫人投身して湖死す

三度伊國に遊ぶ

一千八百十八年六月十一日シエレー家族は故郷の天を後にして三度伊太利に向ひぬ、彼等は直ちにミランに到りコモ、ピザ、プエニス、ローマを訪ひて十二月チープルスに達し爰に其冬をば過しぬ、翌年八月バイロンをプエニスに訪ひけるに渠はパペニの別莊をばシエレーが家族に貸與せり、其后渠は再びチープルスに歸り、亦ピサに移り、其后ローマに行きて亦ピサに歸る、一千八百二十年七月バイロン來り、同年秋ゴドウヰン、シエレーの招きに應じて來る、翌年一月エトワード、ジョン、ツリラウニー亦來る、茲に於てかピザ附近は英國の文星を以て漸く賑はへり、

英國の文星ピザに集る

避暑地を探る

今や春すぎ夏來りてピザの天漸く暑し、於之ツリラウニーとウイリアムスは避暑地を探かさんとして馬に鞭つて出でたり、彼等はスベシア灣のほとり一軒の茅屋を撰びて銷夏の所と定めシエレーを促がして爰に移りぬ、家は平屋にして海邊に建ち直ちに綠波に面す、元來シエレーは海を愛し、水泳を好み、舟遊を喜べり、假令レー、ハトンは一家族を擧げてゼノアに來り、ゼノアよりクレボンに到れりと聞くや歡喜の情禁ずる能はず、嘗て造り置ける「ドン、ジユアン號」に乘して渠を訪ひ渠を促がしてピザに來らしめ、シエレーはクレボンに歸りウイリアムと共に海に航してレリシに歸らんとせり、時に七月八日炎々たる日光猶中天にありて熱氣燒くが如く、船は順風に帆をかけて靜かに港を出でたり、時しも狂風一陣吹き起り、電光閃々萬里に渡り、風は雨を加へて轟々たる雷公將に頭上に落ちんとす、斯の如きこと凡そ半時、風止み、雨収りたれども、激濤怒號の聲は猶止まざりき、シエレーを見送りて海岸に立ちたるツリラウニーは顏色蒼ざめ遙かに海上を望めど

大惨事起る

船沈没して溺る

も、無慘なり、蒼波千里渺々として寄せ來る波の音は聞へども、「ドンジユーアン號」の影たに見えねば渠はピザに到りてハントに告げ、次てバイロンに語れり、之を聞きたるバイロンの唇は地震のゆれる如く動けり、彼の言葉は途切れて聞へり、彼が全オの血脈は漲れり、彼等は直ちに人を派して其沼岸を探りて死體を求めしが之を發見することを能はず、遂に七月十八日キア、リギオの海邊に、エスキラスとキーツの詩集と共に十八世紀英國の大詩人ポルシー、ビイシエー、シエレーの死體は發見せられぬ、八月六日渠が遺骸は詩友バイロン、ハント、ツリラウニー等が悲歎斷腸の中に燒かれて、渠が一子ウイリアムと詩人キーツとの中間にと葬られぬ、

二　バイロン　(Gerge Gordon Noel Byron)

四週間に七版を賣盡して發行者モレーを狂喜せしめ、當時英國の詩宗スコットを瞠若せしめ、一朝にしてロンドン詩界の奏斗と仰がれた

バイロンの容貌

バイロンの父母

るチャイルド、ハロールドの著者ジョージ、ゴルドン、ノエル、バイロンは、其競敵(ライバル)手ソル、ウオター、スコットと均しく他脚に比して一脚一寸五分短かき趁跛にして身の丈け五尺八寸五分、頭髪縮れて茶褐色を帯び、朱唇皓齒、容貌は花の如く麗はしかりき、父なるジョン、バイロンは教育ある者にてありしかども、智の制裁なく而も一定の主義なき無頼漢にして、嘗て他人の妻を奪ひて出奔し、意に其財を奪ひ且つ之を虐侍して放逐し、其后 Catherine Goldon Gight を娶り、やがて其妻の財つくるに及むで、妻子を棄置き他郷に遁走して横死を遂けたり、キャセリンは即ちバイロンの母其性おさ〳〵夫に讓らず、執拗多感愛憎常なく、一度怒れは夜叉の如く、有合ふ物品を投げつけ、衣服を寸断して猶飽き足らず、开が產みおとせし幼なき小供にまでも、火の如く熱せし火箸を投け付けしことさへありき、可憐なり、バイロン之に抗する能はず、胞中の鬱憤遣る瀬なく、或は小刀を咽喉に突き立んとし、或は毒を仰いて自殺を圖らんとしたること屢なりきと、噫十八世紀の詩潮に逆ひ、雷名一時全歐州を震盪せしめたる大詩人バイロンの家庭は、實に斯の如き慘憺たる光景にてありき、バイロンは或點に於て宛然其父母の性質を帯びたり、渠が最も愛し居りし金時計をストーブに投して扮碎せしが如き、或は亦伊國漫遊中に於ける渠が行蹟の如き、母と其父を再現したるが如き觀ありて存せり、

バイロンの家庭

バイロンが初戀の追憶

性質多情多感なる渠バイロンは、一千八百十三年未だ八歳の乳兒たりしに、既にメリー、ダッフ(Mary Duff)なる一少女を慕ひき、『我は今廿五歳になれるが當時のことを思ひ起せば殆と夢の如き感あり、我は愛情なる言葉すらも解し能はざりき、然れ共彼女が(Po)ポー氏に嫁せしと我が母より聞くや、我は俄然卒倒して人事不省と也、我が母をして戒慎せしめたりしと言へば、如何に我は彼女を愛し居りしか明ならん、幽かに夢の如く覺え居れる彼女が花顏、頭髪、衣服は、十六年も過き果てし今日、我が想像裏に存在し居るを見れば、如何に其容貌の愛らしきことよと、我は今思ふなり』と、バイロン十歳のとき大叔父

バイロン園らずも男爵家を相續す

に當れるロールド、バイロン、(Newstead Abbey) ニュースステット、アベーに於て逝けり、渠が後を相續すべきものジョージー、バイロンを除いて他にあらざりければ、園らずも渠は其莊園邸宅を承繼し且つ男爵の榮をも受け得べき身とはなりぬ、アベルヂーン (Aberdeen) に住みたりしバイロンの母は七十五磅にて其家屋を賣り拂ひ、其乳母にバイロンを抱かしめニュースステットに到りて宏大なる門前に立ち其門番に問ひて曰く、『何人が此の家の相續人なるか、』門番答へて曰く『アベルヂーンに住める一少兒なり』と、斯くと聞きたる母と乳母メー、グレーは狂氣の如く悅び、高くバイロンを揚げて祝せり、

ムーガレットパーオーを慕ふ

二歳にして渠は英國最大校の一なるハーロー (Harrow) に送られたり此の時よりして渠は從姉妹なるマーガレット、パアーカー (Margaret Parker) を慕ひき、『彼女は我よりも一ッ或は二ッ年長者なり、××××彼女は何れかより落ちて其背髓を打ち後ち肺病に變して遂に逝けり、彼女は虹もて作られたるが如く美しかりき』總ての美と平和を網羅したるが如く『我が情は我に著しき決果を與へたり、そは我は眠り能はず、食し能はず、安息し能はずして殆と馬鹿の如くなれり』と、渠が始めて世に公にしたる處女作は、渠が十四歲のとき即ちマーガレットを吊へる一篇の追悼歌なりき、

バイロンの處女作

"Hush'd are the wind, and still the evening gloom,
Not e'en a Zephyr wanders through the grove,
Whilst I return, to new my Margaret's tomb,
And scatter flowers on the dust I love."

ハーロー在學中の戀人

ハーロー在學中嘗てニュースステットに住みたりきとき相知れるメリー、アン、カーウオールクとの愛情は再び溫りぬ、彼女は柔和にして而も才智に富み、容貌美にして而も愛嬌溢るゝばかりなりき、バイロンよりも年を取ること二年、常に郊外に遊ひ舟遊を試み、渠か爲に愛蘭土の古歌を歌ひて悅べり、彼女は舞踏を好めども バイロンは趁跛なるか爲に彼女に伴ふ能はず、故に熱情を込めたる艶書を送り以て渠自らを

バイロン戀人に拒絶さる

失望の極馬に鞭うちて走る

樂しとせり、彼女は此に報ゆるに其寫眞と指環を以てしたるも、バイロンに來らずしてジョン、マスターズと言へる者と結婚の約を結べり、バイロンは彼女が其下婢に告げたる言葉を立聞したり『あのビッコの子供に構まつて居られますか"Do you think I care for that lame boy"』斯くと聞きたる渠は憤然として其家を飛び出で、馬に鞭うち何處とも當途なく無我無中に乘り廻して遂にニューステット迄來りしと、其後一ケ年を經過せしとき渠はアンチスレーの丘上に再會するの機會ありき、バイロンは彼女に言へり『此後御身に遇はんときは御身はマスタールスの奥方たらん』と云ふや、彼女は『妾は斯くあらんことを願へり』と答へり、一千八百五年彼女はマスターズ氏に嫁せり、三年を經て彼はアンチスレーに於てマスターズ夫妻及ひ其女子と共に食事を共にせん爲に招かれたり、バイロンは其產れたる女子を見て非常に悅び忽ち一詩を賦してマスターズ夫妻に呈したり、一千八百〇九年バイロン始めて歐州漫遊の途に就かんとするや、彼はマスターズ夫人に一篇の告別詩を送りたり、

"'Tis done, and shivering in the gale
The bark unfurles her snowy sail;
And whistling o'er the bending mast,
Loud sings on high he fresh'ning blast
And I must from this land be gone,
Because I cannot love but one.

* * * * * * * * * *

As some love bird, 'without a mate,
My weary heart is desolate;
I look around and cannot trace
One friendly smile or welcome face,
And ev'n in crowds am still alone,
Because I cannot love but one.

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

I go—but where soe'er I flee,
There's not an eye will weep for me;
There's not a kind congenial heart,
Where I can claim the meanert bart;
Nor thou, who hast my hopes unbone,
Will sigh, although I love but one.",

マスタース夫人は決して幸福なる夫人にてあらざりき、彼女は开が初戀を棄てたるを甚く悔ひ、其后バイロンに書を寄せて頻りに其罪を謝したりき、バイロンは切に彼女に逢はんと欲したりしが渠の妹にしてレー夫人の嚴しく止むるに否み難く、竟に思ひ切りて彼女は會はざりしが彼女は其后夫と別れ、精神病にかゝり獨身にて暮らし、バイロンの死后八年即ち一千八百三十七年遂に逝けり

一千八百十三年バイロン始めてミルバンク嬢(milbanke)と結婚せんと

マスタース夫人其罪を謝す

申出たり、之より前き渠は或宴會に於てキャロリン、ラム嬢(Lady Carolile Lamb)「當時十九歳、后ロールド、メルボルンに嫁す」に遇へり、彼女は快活なる美人にして精神家なりき、彼女は尋常ならずバイロンを戀ひて、止めてとめ難き思ひを漏せり、メルボルの母は之を聞き深き歎きに沈み、バイロンをして早く妻を持たしめたらんには事穩便になるべしとてソル、ラルフ、ミルバンクの令嬢にして彼女の姪に當れるイサベラ、ミルバンクをばバイロンに紹介し、渠が妻とせんことを勸めたり、彼女は二十歳にしてバイロンより若きこと四年、美顏にして自重の精神に富み充分なる教育ありたる婦人にてありき、キャロリン嬢はメルボルン公に嫁して后も、猶バイロンを思へるの情止み難く、人知れず文通を續け居りたり、其后彼女はバイロンの目前に於て自殺を謀りしこと數度ありて、渠バイロンも切なる彼女の思ひを知らず顏にすまずに非らざれども、如何せん夫ある身の不義の戀には如何に放逸なるバイロンも策の施すべきやうもなく、空しく月日を費すうち遂に離婚沙

メルボルン夫人自殺を圖る

ラム嬢バイロンを刺さんとす

バイロン、ミルバンク嬢を娶る

汰となりぬ、其后彼女は其の從姉妹なるミルバンク嬢と渠か結婚を妨害せんとて、人を頼みて渠を刺さんとしたりき、斯の如く殆ど狂氣の沙汰となりたれども内心は猶深く渠を思ひて、バイロンを骨子となしたる小説を作り渠バイロンに献したることさへありき、其后彼女は純粹なる發狂者となり數年間瘋癲病院に入院したるが、全治して退院したる其日のこと馬車に轢ちて往來しけるとき、不圖もバイロンの葬式に出遇ひ絶叫卒倒して遂に黄泉の客とはなれりき。

一千八百十三年バイロンはミルバンク嬢に結婚を申込みて見事に拒絶され、翌年再び申込みて渠が希望は遂げられたり、一千八百十五年正月二日ソル、ラルフ、ミルバンクの住せるシーハム、ハウスに於て渠とミルバンク嬢との結婚は目出度擧けられき、結婚當時は互ひに樂しく暮らし居たれども、バイロンが過激なる性行と痰食の不規則なとが、常に花嫁の氣に逆ひて竟には不和の原因とはなりぬ、バイロンと生死を共にしたる忠僕レッチャーが、『我が奥方を除ひては何人も我が主公の機嫌を取る者あらざるべし』と言へるを見ても渠バイロンの機嫌は如何に六ケ敷かりしこと分りぬべし。

夫人バイロンを去る

一千八百十六年渠が長女エダの生れたる後五週間を經てバイロン夫人は再び夫の顏を見まじと永遠に出て行けり、渠は出て行たる夫人をば再び呼び返さんとして種々に手を盡したりしかども、夫人、バイロンは斷乎として之を拒絶し再びバイロンを見ざりきと、彼女の末た家を出てざるとき嘗てバイロンを諫めたることありき、曰く『若し公にして芝居に出入することを止め、議會に出席することを止めたらんには×××公の馬車を狙擊せんとする惡漢あり、既に新聞紙上にも其噂の散見する所なり』と、渠は答へり『英國若し我を容れざらんか、我れ先づ英國を棄つべし、我はアルプスの山陰綠波層々たる湖水、瑞西自然の美と自由の空氣を呼吸し、アドリア海の水もて我を洗ふ可し、何ぞ我が腐敗せる本國の空氣を吸はんや』とて總て何事にも無頓着なりき。

同年四月廿五日（バイロン夫人の家出せしより三月后）渠は住み馴

バイロン瑞西に向ふ

れしニユースラットの天を後にし、彼の有名なる一篇の告別辭をレデー、バイロンに殘して再び瑞西に向て出發せり。

"Fare thee well! and if forever
Still forever, fare *Thee Well!*
Even though unforgiving, never
'Gainst thee shall my heart rebel."

バイロン漸く放德の行ひあり

斯くして渠は英國を去り、到る所にて英人の宗教、道德、政治を罵倒し、鬱積せる渠が胸裡の憤懣を洩し、其れより肆に酒色に耽り漸く背德の行ひありきと、

伊太利に於ける渠が行爲に就ては、道德家の最も戰慄すべき事實ありて存す、一千八百十九年の春ヴェニスに於て渠は、最も富祐にして當時六十歳、夫人は僅に十七歳なる Theresa Guiccioli 伯爵夫人と通したることなり、夫人は伯爵が第三度目の妻にして、容貌顏る美、金色の頭髮夕日に映して、碧眼綠波漾ひ、心ざまいや温かに學深く、凜然たる

バイロン熱に犯されて逝く

希臘政府三週間の喪を發す

動作は優に詩人の心を迷はしめたるなるべしと、彼女は詩人と相見てより數ヶ月、彼女が父母の許にて終身獨身にて暮すべしとの條件の下に、莫大なる手切金(alimony)と共に離緣狀を受取りながら、詩人と共にピザ (Pisa) に住みたり、其後幾程もなく希臘國民が其の國の獨立を圖らんとして一團の義勇軍を起すや、世に不平滿々たる渠バイロンは直ちに航して之に投じ、レパントに向へる一方の將として兵を指揮し、一千八百二十四年三月三十日渠自身が蓄積せる四千磅の財を擲ちミソロンギー (missolonghi) 市の獨立を宣告し、情婦 Countess Guiccioli の兄弟にしてガンバー (Ganfa) 共に郊外に長遠乘を試みて一種の熱に犯され、一千八百二十四年四月十九日午后五時十五分齡僅かに三十七を以て鬼籍に入りぬ、希臘政府は此の偉大なる一詩人の爲に二十一日間の喪を發し、各官衙は勿論のことギリシヤ全都の戸は閉されて、天地爲に嚴肅、各市爭つて渠が遺骸を得んとし、アテンス市民最も熱してミシアスの寺院に取めんとして葬めけり、然れども渠が遺骸は英國に送られ、グ

レー、ヂョージ街なるソル、エドワールド、ナッチバル家に二日間葬儀の準備として置かれ、遂に九月十六日ハックチル村なる寺院に葬らる、渠が朋友親戚はウエストミニストルアベーに入れんとして運動したりしかども反對者ありて拒絶されぬ、斯の如く渠は一方に於て背德の行ひありしかども、一方に於ては吾人が最も賞揚すべき行蹟ありたりき、何ぞや曰く、彼が公益に關して其財を惜氣なく投じたること、其友に對する義俠心に厚きこと、渠は伊太利に於て莫大なる費用を投じ慈善病院を設立せること、其の友の爲には如何なる勞をも辭せざる等のことこれなり。

賞揚すべき行蹟

三　バルンス (Robart Burns)

赤貧洗ふが如き蘇國一寒村の茅屋に、膏の汗を流して浮世の風に漂ひ、七人の子供を實となして末賴母敷、寄る年波の覺束なき歩みに、星を載き月を踏みて己が田甫に鍬鋤を運ぶウイリアム、バルンスを父として絶對的社會平等主義を唱導し、十九世記革命思潮の導火線たりし、平民的詩人ロバートバルンスは、一千七百五十九年一月廿五日アイル (Ayre) を隔つる二里余の片田舍に、始めて浮世の空氣を呼吸して

平民的詩人バルンズ生る

より、墓場の土と化する三十七ケ年の間、詩人にあるまじき奴隷的苦役に從事し、具さに世の辛酸を嘗め盡して、一千七百九十六年七月廿一日悲しくも渠が病床に侍へりし四人の子供を殘して蓋然逝きぬ。

回顧すれば十五六歳に成長したる渠は、父の農事を援けて、純然たる一個の勞働者たりしが、詩歌を好める渠が天性は、破窓の下覺束なき燈火を便りに、蘇國の古謠を愛讀玩味して除に其詩思と詩形を錬磨せりき、斯の如き片田舍の貧窮裏にもオムニプレゼンスなる戀の芽は發生して、叙獲の麥圃に農車を押しつ、巣食ふ雲雀を驚かして夕べに喧へる俗謠をば、十四の春の花の乙女メリーと共に歌ひて、渠は骨おしみなく働く田野の辛苦忘れてけりと、

詩人が初戀メリー

十九歳ロバートは數學及び測量術を學得せんとて、ガリック (Cairrck)

第二の戀人

第三の戀人

海岸なるキルコスワールド(Kircoswald)に送られたるが、隣家に住みける一少女の最もあぢけなき姿に眼うつりて、六ケ敷數學の問題身に入らねば、何事も學び得ずして空しく我家に歸りけるとぞ。

廿三歳にして渠は已か家より程遠からぬ一農家の娘を慕ひけるが、熱情こめたる戀は碎れて渠が心は破れたり、落膽したる渠は程なくアルバイン(Irvine)に赴き、卑しき商業に隨事せしが、渠が店は燒かれて總ての資產は、悪しき組合員に喰はれたり、運の陰に廻りたる渠は之と同時に父を喪ひ、ギルバルトと共に母と五人の子供を引取り、モスキエルにて農業に從事せしが、二年の不作に渠が家計はます〳〵不如意となりぬ、かゝる貧窮落膽の境遇にありても、渠は詩歌に心を潛めて渠が傑作の隨一たるショリー、ベッガース(Julig Beggars)は出てたり。

貧窮失望裏に渠が傑作は出てたり

一千七百八十六年渠と結婚の約なり居りしハイランド、メリーは、結婚の準備なさんとて彼女が父の許に歸りたり、一千七百八十六年五月第二の日曜日詩人とメリーはアイルの川清く流るゝ岸邊に出逢ひて流るゝ水に手を洗ひ、聖書の句を讀みかわすと共に互に手に持ちたりし聖書を交換して、永遠變るまじきことをば堅くも契ひき、同年八月メリーは詩人に會はんとてグリンノックに來り、病める彼女が兄弟を見舞ひたりしに、病は熱にして直に彼女に感染し、薔の花の春にも逢はで、敢なく散り果てければ詩人は世にもあるまじき心地して深く歎き悲しみたりきと。

詩人熱病にかゝりて死す

第四の詩人

詩人とメリーの結婚約束中律義一遍なる石工棟梁の娘にジエレ、アルモール(Jean Armour)と云ふかありけり、教育なき女にはありけれども天性なせる美貌と優しき心もて、深くも詩人を戀ひ慕ひて、メリーの約束反古にせんとて務め居ける折、幸か不幸かメリーは彼の世の人になりければ、眼り裂く思ひのいかで破れざらん、戀に弱き詩人の心は溶けて、道ならぬ結婚は仕遂げられたり、斯くと聞きたる父は烈火の如く怒りて、詩人を捕へ教會裁判に附しやかて牢獄にも繫がんとしてければ、詩人の驚き並み〳〵ならず、僅かの旅費を懐に西印度ジ

不正の結婚に父は詩人を牢獄に投せんとす

マイカに遁走せんと企てたるに、救へる人のあると同時に六百届に余れる渠が第一詩集と三百五十篇になれる第二詩集の出版されて、貴賤貧富、老若男女の區別はなしに、爭ひ買ひ求められアルクシャルの百性詩人の名は、エデンバラ大學に喧しく、一千七百八十六年十一月廿八日渠は友の貸し呉れたる小き馬に打ち跨り、二日の旅路に名譽の衣かむりてコンビンクトンメーンに着き一農家に泊りけるに、敷知れぬ百姓どもは渠を見んとて犇けり、エデンバラに着きたる渠は何れの會合にも招かれて其身に餘る觀迎を受けたれども、貧は猶渠に附き纏ひて、一室二人一週三シルリングの下宿屋に名も知れぬ青年と共に住みたり、翌年四月には渠が詩集の再版最も立派に製本されて、半年あたり待ちくたぶれたれども五百磅の大金身につきて、狂氣の如く悅び直ちに母を養へるギルバールトに一百八十磅を送り屆けたり、渠は此の悅びを配たんとして母に時計と帽子を購ひ、三人の妹に絹の衣服を調ひ、喜び勇みて故郷を指して歸りたりけり、故郷の友輩近所の人々、殊に

百姓詩人の名遠くエデンバラ大學に響く

詩集再版五百磅の大金其身につく

牢獄に繋かんとしたるアールモールの一家がらりと變りて村はずれ迄も出て迎ひたり、加之ジェン、アーモールの愛情も返りて、詩人の家庭は時ならぬ春の花咲き亂れたり、翌冬渠は再びエデンバラに赴きたるに、好奇心なる都人士の厭きやすきと、詩人の酒厭なるとが彼等の氣に合はず、昨日にかわる今日の人心を歎きて渠は一年に餘る月日を費し亦もや故郷に歸り來れり。

再びエデンバラに赴きて失望す

第五の戀人

エデンバラに滯留中、多少は資産を有したれども、二人の小供と共に夫に棄られたる、女流の文士 Agnes M'Lehose の慕ふ所となりて之に情を通じ、詩人はシルバンテル (Sylvander) 彼女はクラリンダー (Clarinda) なる變名の下に彼我の文通頻なりき、一千七百八十八年三月の終りに渠はエデンバラより歸鄉してエリスランドに田圃を購ひ、ジェン、アーモールと正統なる結婚式を擧げて農業に隨事し、彼女の生みたる私生の双兒を法律上正式の子供となしたり、詩人は曰へり「ジェンは極く善人にして深く我を愛し、壯健北類にして極めて快活、聊かも嫉妬の

三度エデンバラに赴く

念なしと雖も聖經の一葉をも讀み能はざる明盲なりき』と、歸郷結婚後クラリンダとの交通は僅に二回なりしも、彼我の愛情は猶冷めざりきと見え、渠が三度エヂンバラに赴きたる時には、第一番にクラリンダを訪問したりき、時恰も彼女は西印度にある夫を尋ね見んとて出立せんとする間際にてありき、詩人と彼女が對話は最も短かく而も最も悲哀なるものにて、永遠の別れなりとは知らざりし彼等の名殘は最も惜まれてけるとぞ。

クラリンダと最後の別れ

一千七百九十六年タンロップ夫人に送りたる書翰に曰く『我は最も深き辛酸の杯を飲みたり、昨秋には一人の娘と一人の小供を喪ひ、今哉我はリユーマチツク熱に犯されて、歩行するも自由ならず將に死に頻せんとしつゝあり』きと、同年五月渠は再び病みて床に就きたると同時に、妻なるジエーンも亦病みければ、収税吏の娘にしてゼーシーレーソースなる者の心からなる看護を受け、七月海水に浴せんとしてブラー(Braw)に赴き、同月十八日渠海水浴より歸郷するや、詩人の病ひ

詩人の死期近づく

覺束なきに、村民は此所彼所に集ひて甚く其心を痛め始めたり、四日目に到り自由平等主義を皷吹して彼等の爲に靈碎したる平民的詩人ロバールト、ボルンズは遂に逝きたり。

斯くも哀れに世より何物もなすして、蘇國の大詩人たるバルンス逝くや、國民は今更に目醒めたるか如く、何事か詩人になさざるべきことを竟めたりしかども既に遲かりき、然るもDaufriesに於ける嚴肅なる渠が國葬には一万二千餘の會葬者ありき、加之渠が家族を養ふ爲にたちどころに七百磅を超ゆる義献金は集まれり、一千八百十五年渠が死後十九年目にして渠が遺骨はセント、ミカエルの寺院に改葬せられ、宏大なる紀念碑は建立せられ、詩人が生れたるアイルには宏大なる石碑を建てられたると同時に、希臘羅馬時代の建築に摸擬して、コリンシアル圓柱に支へられたる高さ六十呎に除れる輪塔の建設を見るに到れり、石碑の内部にはシエンの結婚指輪(ウエツデングリング)一個、クラリンダか詩人に與へたる二個の金盃、ハイランド、メリーの與へたる聖書、エデンバラ

詩人が國葬に會葬者一万四千有餘

宏大なる紀念碑建立せらる

にて出版されたる渠が元版の詩集一冊は寶物として陳列されたりき。

渠は一石工の長子なり

渠が父母の嚴格

カーライル憤然志を立てエディンバラに向ふ

第六章

情の文豪

カーライル

一ヶ年間の稼高僅に一百磅の收入を以て、九人の子女を養成せさる可からさる、一石工の長子トーマス、カーライルは、一千七百九十五年十二月四日、蘇國エデンバラを去る北八十哩の一避邑エクレフエカン(Ecclefechan)に生る、父はヂェームス、母はマーガレットとて共に熱心なる新教信徒にして、其家庭は最も嚴肅なるものにてありき。

無益の言を發せす、過去の不快を語らす、信心鐵の如く嘗て疑惑の念に犯されす、上帝をのみ懼れたりし父母の膝下にあつて普通の教育を受けたりし渠は、一千八百〇九年十一月九日齡僅かに十四歲にして其友トム、スメール共に、憤然志を立て八十哩さきなるエヂムバラ大學に入學せん爲め父母の膝下を辭したりき、『朝またき霧たち籠むる暗

八十哩の旅行は玉子と芋

き森陰すぎて行く、二人の影を見送りて村はずれまで來りし母は傍すぎ行く馬車を指し且つ數個の雞卵と湯煮芋を渠に與へて曰く、「爾の父は爾をしてかの馬車に乘らしめざる程貧しき生活なるを我は悲めり、爾はこの貧に打勝ち得べきやトム」と、言ひ續けんとして母はハンカチーフもて其顏を覆へりき『我は千万無量の感慨に歴せられて一言の返辭をも出てず、唯我が頭を頷くのみなりき』と五十七年經過せしわとにて渠は當時の有樣をは其友に語りき。

渠正に廿七歳一女性の師となる

一千八百二十一年渠正に廿七歳なるとき、其友エドワード、アービングより一女性を敎ふ可きことを囑託せられき、女性はヂョン、ノックスの子孫博士ウエルシなる者の一人娘にして其名をヂェン、ベーリー、ウエルシと言へり、背はすらりと高くて、髪黑く、眼は大きくて、其容姿、動作、總て令嬢に背かざる風采を具へ、言語明かに而も精神快活なりき、彼女はエドワード、アービングを師として熱心に文學を研究したりしか、渠はイサベラ、マーランなるものと結婚せし決果其友

女性の風采

女流の文士幾十の緣談を卻けて其希望を告白す

カーライルに彼女が師たらんことを乞ひて承諾を得たり、女流の一文士たらんとの功名心に驅られたる彼女は、羅獨文學を研鑽し時々之が評論を試みてカーライルに呈出したりき、着眼緻密、行文雄麗、女流の文士として既に文壇に馳騁するの價値は確なりき、日は日を加へ月は月を重ねて彼我の交情深くなりゆくうちに、ヂェンを愛したりし父は逝きて、彼女は母と共に其居を同うすべきことゝはなれり。

一千八百廿三年の夏、正に廿三歳となりたるヂェーンは、幾十の緣談を却けて、自ら敬愛すべき人はカーライル其人を除いて他なきことをは表白したり、『妾は君を愛す、×××××然れども君をして若し妾が兄弟たらしめは、妾が之を愛するの愛情と今や君を愛するの愛情は毫も差異なきことを表白せん、妾は君が信實なる而も心醉したる友なれとも、斷して君が妻たらし、君は將來クロサスの富を積み、全世界が君に歸する名譽の上に立つとも、妾は斷して君に嫁すまし』之を受けたる渠の返翰に言へり『爾は我をして姉妹の如くに愛すべきこ

愛情なる言葉此上に用ゐず

先師私にシェンを愛す

妾は斷して戀を弄ふものにあらず

とを言へり、我は世人の所謂愛情なる言葉以上に爾を愛せん、而も爾の外に我妻たるべきものなし、一人もなしと斷言せん」と。

末來の夫はカーライルの外一人もあるなきことを自ら斷定したるヂェーンは、何か故に渠か妻たるまじきと言へるか、曰く理あり、裏きに彼女か師たりしエドワード、アービングは私にヂェーンを愛して、陰然夫妻の默約ありしか如く念はしめたるか故に例令渠かマーランと結婚したりしとは雖も、忘れ難き初戀の未練は猶彼女か胸裏に存在して、カーライルに對する彼女か戀の鋭鋒を遮らしめたり、彼女亦曰へり、『妾は君を愛す、然れとも君を愛する妾か愛情は、嘗て道德の線路を逸したることなしと信せり、妾は斷して戀を弄ふものにあらし、妾か君を愛するの愛情は妾か判斷を曇らすか如きものにあらし、妾は君を敬愛すなり、妾は君に同情を表するなり、君か爲に下賤なる勞働をも厭はぬなり、妾か君に對する愛情は、妾か自ら製作したるものにあらて、君か感化の下に自然に發生したるものなり』と、然れとも一度戀の領地に踏み入りたる彼女は竟に戀の軛を架せられて之か支配の下に立ちたり。

渠女は竟に戀の軛か下に立ちたり

渠に竟に結婚の式を擧く

一千八百廿六年八月十七日カーライル卅二歳ヂェーン廿五歳にて竟に結婚の式を擧け、エデンバラ、カメリー、バンク廿一番地に彼等か住居を定めたり、渠は母に送りて曰く『我か家は最も我意に叶いたるものにして万事好都合に運ひたり、我か妻は我か知り得る何人の妻よりも遙に善良なるものにして、憂鬱なる我か容貌の之に接するときには、恰も春野雲雀に遇へる如くに爽快となるなり』と如何に其家庭の樂しかりしか念ふ可し、カーライルは内氣にして人に面會するを嫌ひたりしか、夫人は最も快話而も交際の術に長しけれは、訪ひ來れる文士を待遇(エントルテン)する一切は夫人自ら其任に當りて遺憾なかりき、デ、クヰンシー、ソル、ウイリアム、ハミルトン、ウイルソン、クリストハアー、ノールス、及ひエデンバラ評論のゼフレー等は當時來客文士の重なるものにてありき。

渠等か來客の文士

退等は大英國中最も寂寞たるクレゲンパトックに移る

カメリー、バンクに住すること十八ケ月にして、渠か妻の所有地にして渠か弟なるアリックか村長を務め居りけるクレゲンパットック(Craigen puttock)に移りたり、クレゲンパットックは海上を拔くこと七百呎、ダンフレースを去ること十六哩にして、大英國領地中最も寂漠たる地なりとフロードは記せり、一哩内に隣家を有せさる斯の如き淋しき避邑に、夫人を伴ひ行くことの如何にも愧すへき境遇なりしとは雖も、渠か財政はエデンバラに住むへく許されさりければ、不已得夫人同伴して數百年來建ち續ける此の空家に移れり、婦人は其友に送りて曰く『妾は斯の如き砂漠の中央に建てる一軒家に唯一人殘されて眠り能はさること幾夜ありしか知れす』と、渠は斯の如き一寒村に閑居して其身を犧牲とし社會に貢献したる永遠不滅の供物に對しては、何人も感謝し措く能はさるなり、クレゲンパトックの淋しき住居に勞れ果てたる夫人は、其年末クリスマスをは能き機會となして、十五哩さきなるランフランドに其母を訪はんとして出て行けり、一千八三百十年渠は五磅を以て

夫人は母を訪ひ同せんとして出て行く

著述は最も恐るる可き業なり

一冬を過すへき貧窮に陷りたるに、妻は熱に犯されて床に就き、獨乙に留學せる舍弟ジョンは最も哀れなる書翰を送り來れるとは雖も、大膽なる渠か精神は聊も之に屈する能はすして、『著述は最も恐るへき業なりと雖も恐る可き怠惰に比すれは猶優れり』とて朝は四時に起き夜は十時に至る迄絶へす其筆を動かしたりき、獨逸文學(Gsermau Literature)既に脫稿したれとも何れの書肆も之を出版するの勇氣なく、サルトス、リゾルダスの一部成りてロンドン某雜誌社に送りけれとも難有迷惑(declined with thanks)を以て返還されぬ、加之渠か小妹マーガレット死去の報は達し、農事に從事せし弟アリックは、參百磅の損失を蒙り僅に銅貨十二ペンスを懷にして移轉するの已むなき非境に逢遇せり、一千八百三十一年八月四日午前二時克已自尊精神に富みたる渠は其原稿を携へてロンドンに出立せり、渠はモーレーに其原稿を呈出して出版せんことを冗めたるに、一ケ月間調査して猶迷ひけれは、渠は之をフレザーに出版せんとを乞はんとしたるに、フレザーは之か出版損失豫

サルトスリ、ゾリタスを某雜誌社に移して返却さる

渠か身邊困難具に到る

渠は憤然原稿を携へてロンドンに出立す

渠は出版損失一百五十磅を請求せらる

算一百五十磅を渠に請求したり、エテンバラの辨護士某は暫時待つ可しと忠告せしに、渠は之に答へて言へり、『我は終極の極(the end of eterinty)までも待つへし』と、六週間の淋しき留守をなし居りたる夫人は、其の淋しさに堪え兼ねてロンドンに來れり、彼等に交誼あるジョン、スチユワート、ミル、ンー、ハントを始めとして、幾多の文士は渠等夫妻を見んとして集り來れり、六ケ月滯在の後貧は再ひクレグレバトックに歸り行く可しと命しぬ。

貧は再ひ渠等夫婦を寂寞の地に逢ふ

衣服、智學のなき一斷片となして雜誌社に授す

渠等の家庭に時ならぬ花を咲かす

翌年正月渠等夫妻は確定したる收入を覓んとしてエデンバラに來れり、當時グラスゴー大學教授の職に空位ありて、渠か唯一の友ジェフレー頻りに運動したりしかと見事に失敗に期したり、五月再ひ夫人の所謂砂漠クレググンバットックに歸れり、渠はサルトルを寸斷して一斷片となし、フンザーが主幹の下なる一雜誌に寄稿して幾許かの報酬を得たり、暫時にしてフレザー夫妻及ひ夫人の母なるウエルシ夫人來りて、時ならぬ花は夫人の所謂此の砂漠なる家庭に咲きたり、同年八月渠か

一青年万里の波濤を超へて來る

ノア洪水以來の大珍客

始めに佛國革命史の起草に志す

エトンバラ大學教授の空位を充さみとして失敗す

文才を慕ひ万里の波濤を遠しとせす、斯の如き寂漠たる曠野の一軒家に態々尋ね來れる一青年あり、渠は其の母に送りて曰く『昨夜我か家に一珍客尋ね來れり、渠は今日迄我か見しものゝ中にて最も愉快を感せしめたる來客なりき、我等は互に語り互に問ひて夜の更くるを覺えさりしか、渠は明日出立すへしと聞きて我等は甚く其の別を惜めり、ヂエーンは曰へり、我等はノアの大洪水に遇ひて爰に遁れ來りたる以來始めて斯の如き愉快の者を見たりき』と、何そ計らん之れ米のエマルソンならんとは！

今哉渠は佛國革命史を起稿せんとの念熾にして之か材料蒐集の爲に佛國に渡航せんと思ひたりしか囊中一錢の貯蓄なかりけれは渠は涙を飲んで思ひ止めき、折しもエデンバラ大學に天文學教授と修辭學教授の空位ありとの事をは新聞紙上にて散見しけれは、又しもジェフレーの手を通し、之か空位を希望したりしか再ひ失敗を招きたりき、夫人カーライルは夫の辛苦を氣遣ひ且つ日々貧と戰ふの勇氣盡き果てゝ暫時

保養せんとて彼女か母の許に歸れり。

一千八百三十四年六月カーライル夫妻ロンドンに來りシエルシーに假偶す渠若し再ひ爰に失敗を招かは、米國に渡りてエマルソンに倚らんと決心を定たり、今や渠は佛國革命史を起稿せんと急れとも、さて何人も之か出版を承諾する者なかりき、獨りフレザーのみ無原稿料にて漸く出版せんことを諾したり、一千八百三十五年二月七日佛國革命史第一卷成る、親友ジョン、スチユワート、ミル來りて渠か自宅に於て之を閲覧せんことを乞ふことを頻りなりけれは、カーライルは此の請求を容れて貴重なる原稿をは渠に貸與せり、偶々テーロル夫人來るありて談カーライルに及ふや、ミルの借り來りたる原稿はテーロル夫人(後日ミルの妻となる)に渡りて、竟に下婢の爲にストーブの燃付となり、熱血を灑ける渠か原稿は、憫むへし一片の黑烟と化し畢れり、之を聞きたるミルの顔色は蒼白となり、直ちに二百磅の銀行小切手を携へ、頻りに渠か輕卒の罪を謝して、銀行劵をは渠に渡さんとしたるに渠は

渠は米國に渡りエマルソンに倚らんとす

熱血を灑ける原稿は一片の黑烟と化す

ミル原稿燒失の賠償金二百磅を呈す

斷乎として請取るへくも非らされは漸く其の半額を押し付け這々の躰にて渠は歸り去りぬ。

金錢を以て償ひ得へからさる貴重の原稿燒かれて渠は、失望落膽身心共に勞れたれとも再ひ勇を鼓して之か起稿に就けり、時に夫人カーライル健康すくれす又もや彼女か母の許にと歸りぬ、一千八百三十七年正月十二日午後十時、二ケ年か辛苦の下に佛國革命史の終卷成る、夫人カーライル一友に送りて曰く

佛國革命史脫稿す

"Let no woman who values peace of soul ever dream of marrying an author"

精神の平和を希ふ婦人は斷して文士に嫁せんことを夢む勿れ、如何なる生涯の辛苦をも堪へ忍ふ可しとの大決心を以て嫁したる彼女は夫か間斷なき過働と之に伴ふ貧とに勞れて、斯の如く精神過激なる文士に嫁したることをは深くも悔み始めたりき。

精神の平和を希ふ婦人は文士に嫁す勿れ

裏に渠等か結婚式を擧けんとするや、双方の疑懼は非常なるものにして、恰も斷頭臺に上らんとするか如き觀ありき、ウエルシ嬢は言へり

渠等か結婚當時の觀念

新婚旅行の護衛

『結婚の準備はと"Horrid circumstance"なるものなし」、憶病なるカーライルは言へり、『新婚旅行には我は護衛として我弟ジョンを伴ひ行かん』、ウエルシ嬢は返翰を送りて曰く『道一吋かりともジョンか同伴を許さす』カーライル言へり、『然らは我か精神を落付くる爲に喫烟を許せよ』と、渠等將に結婚に入らんとする最終の書翰にウエルシ嬢は記せり

退等か結婚に入る最終の書翰

The Last speach and Marrying Words of that unfortunate Yong Woman,

Jane Ballie Wels',

結婚に對する退等の觀念

カーライル之に答へて曰く、

"A most delightful and swarlike melody is in them; a tenderness and warm, devoted trust, worthy of such a maiden bidding farewell to that unmerried earth of which she was the fairest ornament."

故に渠等は結婚の生活を以て、始めより樂かるへきものとは念はさりしなり、否な寧ろ渠等は之を以て最も恐るへきものとはなしたりしなり、然れとも渠等の互に別居し居れる暫時たりとも、渠等は最も濃厚なる Love-letter を交換せすには居らさりしなり、渠等の書翰をして若し他人に見せしなは、如何に渠等の家庭は樂しかるへしと思はしむるとは雖も、實際大に之を反對の現像を表はし居りしなり、夫人カーライルは

夫人カーライルの性質

"A hot temper, and a longue, when she was angry, like a cats, which wou'd take the skin off at a touch"

何事にも熱し易くて噪しく、怒れる時には猫の如く僅かに其一部に觸りても忽ち搔裂かるへし

ヂクソン令嬢と夫人カーライルの談話

渠等嘗てシェルシーに住ひけるとき、渠等か家族と最も懇意にせるエラ、ヂクソン嬢と言へる一令嬢ありけり、或日渠等を訪ひけるとき令嬢は戸口に於てカーライルに遇へり、渠は無言にして少しく其を頭下けつ漂然として出て行けり、令嬢は下婢に案内されつ夫人の室に到れは夫人は安樂椅子に横臥し居りたり、横臥しなから夫人は眼を光らして曰へり『カーラールに遇へりや』『然り戸口にて逢ひたれとも變な顏付して渠は出て行けり』、如何になせしか、と令嬢は問へり、『非常なる頭痛

夫人カーライルか不道理的嫉妬

の爲に二日間此所に居れとも、唯の一度しか來らすして渠は如何にせしとか問ひしのみなれは、有合ふ茶碗を投けつけたるに渠は默して去れり』と、蓋し之れか恐くはカーライルかアシボルン嬢との交際餘りに親密に過きたるの決果として、不道理的嫉妬に基くものなりとも言へり、渠等の友たりし詩人テニソンは言ふ『カーライル及ひ夫人カーライルの結婚したるは社會の爲に最も善き事ともなり、何となれは若し渠等二人の結婚するなくんは四人の不幸なる者を出すへけれはなり』と、

渠等の結婚なくんは世界は四人の不幸者を生ぜん

一千八百六十五年カーライル七十歳にしてエデンバラ大學教頭に選出されたり、顧れは渠未た十四歳の若年たりしとき志を立てゝ故郷を出て、八十餘哩を歩行して漸く爰に達したる渠は今や此の最大なる名譽を負へり、教授の職を得んとして二度失敗したる渠は、エデンバラ大學の講堂、二千有余の青年學生と來聽者に向て滔々と辨し去れり、立錐の餘地なき滿場は狂するか如くに拍手せり、渠を迎へんとて遣はされたるチンダー教授は夫人カーロイルに打電して "A perfect triumph"

渠か最后の勝利

『全勝利』を報せり、之れより先きカーライル將にエデンバラに向はんとするや、夫人は三度カーライル接吻せり、噫之れ夫人か永遠の別れならんとは！

夫人か永遠の告別

仝年四月廿一日夫人はビクトリア、グートの近傍に其馬車を追へるとき、愛犬チロー車輪に敷らんとしけれは、俄に馬を止めて飛ひ下り、之を抱いて再ひ車中に入れるに、其后何れの方向に行くへきか夫人の言葉なかりけれは、御者は私に車内を窺ひ見たるに、可憐なり夫人は愛犬を抱きつゝ顏色蒼白に變して既に絶命し居りたり、噫四十年間貧と戰ひて精神を勞したる夫人カーロイル逝けり、彼女はチンダー教授の打電を知らさりしなり、彼女は夫カーライルの全勝利を聞かすして逝けり、噫之れ何たる慘絶悲絶の椿事なるそや。

夫人カーライルの逝死

女皇ビクトリア吊辭を送る

女皇ビクトリア陛下は女官アウガスタ、スタレーを遣して吊辭を述へしめたり、噫彼女は此の名譽ある事情を知らすして逝けり、カーラ

カーライル夫人の爲に追悼錄を出版す

女皇ビクトリヤ謁見を覓む

渠が八十歳の誕生日には電雨の如く來る

渠が遺骸はウエスト、ミニステル、アベーに入らす

イルは正に此所らなるへしと思へるハイデー公園をは、雨降れとも風吹けとも、日々額を抵れてさ迷へり、渠は夫人カーライルか追悼錄を出せり、噫彼女は草葉の蔭にて夫人カーライルが、彼女に盡せる斯の如き原稿をは果して夢み居れりしや否や。

一千八百六十九年、女皇ビクトリア陛下はウエストミニステルの教院に於て渠に謁見を求めたり、渠が著作はた其名聲は米國を始として全歐洲を震盪せり、渠か八十歳の誕生日には蘇國知名有志者一百名より黄金のメダールは來れり、獨國宰相ビスマーク公始め知名の文士より數百通の祝電は來れり、斯くして渠は最終の勝利を得、一千八百十一年齢八十一歳にして歿す、渠が遺骸はウエスト、ミニステル、アベーに入らんとしたれとも、渠が遺言によりてエックレフカンなるユルクヤールトの墓地に渠か父母の間に挾りて葬られぬ。

第七章

文豪と婦人

サミエル、ヂョンソン

ジョンソン生の生活

渠が二の觀念

寓意小説「ラセラス」物語の著者として普く我學生間に知らるゝ博士ヂョンソンは、家計祐ならざる一書肆の家に生れき、オックスフォールト大學出身者なれとも、家計艱難なりしが爲に、首尾よく業を終へたるものゝ如くに思はれざりき、渠廿歳の頃より四十五歳頃までは、パンの爲に戰ひ、パンの爲に腰を折り、或は俗書肆に使役され、或は私立學校教師となり、或は私塾を開き、或は雜誌記者となり、或は劇場の筋書者となり、『英國大辭典』の編纂成るに及べる迄は、殆ぞカーライルに均しき辛酸を嘗めたりき、(委しき表面の傳記は民友社出版内田貢氏の一著に讓りて、我輩は今爰に渠が裏面の或一部を描かん)

按ふにヂョンソンは精神的戀を弄びしならむ、俗婦ルーシー、ホルタ

ーの如き、或は倨傲なるモリー、アストンの如き、或は嚴肅なるエル、ブースビーの如き、或は亦愛嬌溢るゝスレール夫人の如き、渠は務めて婦人と交際せんとし、務めて之に接近せんとはしたりき、見よ渠は半死白頭の翁七十歳となりても猶斯の如き言を吐けり、

"If I had no duties and no refrence to futurity, I would spend my life driving in a postchaise with a pretty 'woman.'"

博士唯一の希望

『若し我をして義務なく亦未來の關聯なかりせば我は佳人を伴ふて盛に驛車を追ひ以て我が生涯を送らん』と、

博士とコルモンドー夫人

嗚呼渠は人生行路の各驛に婦人を備へて、盛に之と同乘し順次に渠が生活の驛路を過さしめんとの空想を抱けり、文士として渠は確に德行の名ありしかども、婦人に對しては餘り男らしき行蹟あらはれ居らざりき、渠嘗て玉顏麗容其肌雪の如きコルモンドレー夫人を見るや、思はず其手を取り上げ、眼近く持ち來り頭を傾けて頻りに之を歎賞し、

好色博士美人の間に驚く

『噫如何に麗はしき令夫人よ』と叫びぬ、迷惑顏なる夫人は博士に問へり『御用おすみなれば其手をお返し被下さるや』、見蕩れて除念なかりき渠は打ち驚き自ら其手を放てりと言ふ、噫如何に滑稽じみたる好色博士ならずや。

二人の令嬢博士を訪ふ

或日のこと二人の若き令嬢、メソデスト教理を論議せんとて、スタッドセーアより博士の許に訪ひ來れることあり、渠冷笑して曰く『御令嬢の方々イザお立ち召され、我等はマッキスウエル君と共にマイトルに行き、食事しながら綏々貴説拜聽せん』と言ひければ渠等はマイトルに行きたり、食事後渠は令嬢の一人をば膝の上に上せて、半時あまり頻りにフザケければ折角の論議も竟に御流れとはなれり、渠は曰へり、『婦人の説教は犬の後足にて歩むが如し、縱令歩み能ふとするも餘程おかしきものなり』と。

レーノルズの令嬢嘗て彼女が飜譯出版せるホーレスを持ち來り博士に示して批評を求めたり、博士曰く『令嬢の著としては上作なり、

女流の文士と博士

女優と博士の問答

然れども絶品に比しては、×××××無、皆無、さりながら著者には餘程上作なるべしと思はる』と冷笑したり、阿諛は何人にも悅ばるゝ如く博士にも亦悅ばれたり、然れども度に過ぎたる阿諛は如何に女好きなる渠と雖も敢て容赦せざりき、女流の文士ハンナ、ムーア嘗て博士に面會を求ける時、頻りに博士の著を譽め且つ自から其著に感化を受けたること多しと再三再四操返し述ぶるや、渠は憤然として曰く、『貴女よ、譽むべき人の面前に於て其人を譽めんとせば、宜しく其人の譽むべき價値あるや否やを調査して而して後之をなすべし』とて獨り彼女を殘して立ち去れり、渠將に死せんとする一ケ年シッドンスと言ふる女優博士の許に訪ひ來り、應接所にて面謁せんとするや、婦人の取るべき椅子なかりければ、頓知に富める渠は曰へり『貴女よ、貴女は座すべき椅子なくして多人數を困らせること度々あれば、今日は貴女一人困るとても敢て差支はなかるべし』と。

渠既に老年に及びたる頃、或夜々會に招かれたることありき、折

博士と夜會

夜會給仕女と博士の問答

侯爵令孃と博士

から入り來る幾多の令孃中にて最も若く最も美しき一令孃に、渠が傍に着席せんことを請ひて宜しく其の承諾を得たり、博士の右側に着席したる佳人問ふて曰く、『如何にや』博士曰く『I am very ill, even when you are near me: What should I be, were you at distance?』『彌(あなた)が我が傍に居てさへ氣分が惡るいもの、離れて居つては扱だうなるか、(多分死ぬかもしれぬ！)』折から一令孃の博士の前に珈琲を運び來るあり、令孃は其珈琲(ヒーポット)入を指し戲れて曰く『"The only thing she could call her own is this" 私しのものだと言へるのは此れ(コーヒーポット)ばッかりですよと言ひければ渠は賺(ふ)さず之に答へて言へり『"Don't say so, my dear, I hope you don't reckon my heart as nothing." 左樣(さう)おッしやるな、私も何にもないものだと思つチや困りますよ』と、渠は其容貌の見苦しきにも係はらず、婦人が交際場裏に於ける大立物にてありき、何れの宴會何れの夜會に到るも、渠は常に婦人を以て取卷かれ居るなり、デボンセーア侯爵令孃として、當時英國第一流の佳人すらも猶博士が口前に載せられたること

ボズウエルと博士

妾は博士が傍に着席せんとす

とすらありきと言へば如何に渠は婦人を手馴くることに於て妙を得たるか、吾人は此點に於ても亦渠が博士の號を空うせざりきと思へり、一千七百七十三年ボスウエルを伴ひて蘇國に漫遊したることありけるとき、快活にして愛嬌ある一婦人の博士の膝の上に座りて、渠が頸に手をかけて頬りに接吻したることあり、渠は得々として曰へり『Do it again, let us see who will tire first ザーもう一度おしなさい、どッちか先につかれるか見ませう』と、蓋し之れボスウエルの實見したる所なりき、『妾は博士ヂョンソンの側に座らんと欲す、渠は妾を優侍し呉るゝればなり』とは當時の交際場裏の花と呼れたる、有名なるキチー、クライブの言葉なりき、渠は嘗てボスウエルを伴ひリッチフィルに旅行せしことありき、渠はボスウエルに告げて、『我は四十年前爰に來りたることありて、當時此所にて有名なる女優エムメットなる者を愛せしことありけるが、彼女は今は如何になりか殆と忘れてけり』と言ふや、博士の傍に居りたるモリー、アストン嬢答へて曰く『Why the interest of money is lower when mony is plentiful.』金が多ければ利子が下るではありませんか』と、

博士の慈善的行爲

夫れ斯の如く博士は精神的婦人を弄びしとは雖も、シエレーが如く、或はバイロンが如く、或はバルンズが如く、俗行に之を實現せざりし一事は吾人の最も渠に悅ぶ所なり、殊に渠は最も可憐なる婦人に同情を表して、出來得る限り之を救助せしことなり、病死せし渠が母の友にして盲目なるウイリア夫人をば、渠が家に引取りて終身世話し遣るたること、或は亦夜更けて道路に倒れ居れる病婦人を救けて、渠自ら之を背負ひ渠が家に連れ來りて、彼女が病氣の全治する迄は充分なる保護を與へたるが如き、慈善的行爲に關しては、吾人の大に渠に感謝し措く所なりとす。

博士と新婚旅行

交際場裏に於る博士ヂョンソン夫れ既に斯の如し、然らば夫としての渠果して如何、渠正に廿六歳なる時寡婦にして而も二十歳年長者たるポルター夫人と結婚したりき、新婚旅行として渠は花嫁を伴ひ、ボルミングハムよりデルビーに遠乘したりき、然に博士の馬早くして花嫁

結婚生涯の困難を暗示す

の馬後れたれば、夫人は博士の無情を囁きぬ、ヂョンツン手綱を緩めけるに夫人の馬は先に出でぬ、夫人は博士の除り後れ勝ちなるを怒れり、斯くと聞きたる渠は馬に鞭を加へ、砂塵を揚げて逸しければ、渠の影は早や林中に葬られてけり、花嫁の博士に追ひ付けるとき、夫人の眼は涙を以て濕へり、時に渠は結婚生涯（マリエージ・トライフ）の困難なること夫れ斯の如きものなりと暗示しぬ。

博士の告白

夫人ヂョンソンはカーライル夫人の如く學才なかりしかども至て柔順して而も正直なりき、博士は最も正直に夫人に告げて曰へり、渠は貶しき生れにして僅少の貯蓄だもなく、殊に渠が伯父に當れる者は縊首して死せる事までも遠慮なく白狀しければ、之に感激したる夫人も言へり、彼女は博士よりも多くの金はなかるべく、且つ親戚中に縊首したる者なしとは雖も、正に縊首せんほどに困難なるものありと述べたり、斯の如く渠等夫妻は屢々暗示と告白を以て互に結婚生涯に入りたれば、紛騷多かるべき文士としての渠が家庭は極めて平和なるものにてありきと。

博士私塾を開く

渠はなか〳〵の滑稽家なりき、渠廿一歳夫人五十一歳なる時、彼女に與へたる書翰に My dear girl, My Charming love と書けり、結婚後間もなく、夫人の費用を以て私塾を開きたることありき、内弟子三人の一人なるグリックは言へり、『我が師の夫人は、甚く肥え太りて其胸の突き出たること非常なるが上に、丸き顔の赤き頰は腫起（ふくれあがり）して、滑稽芝居に見るが如き婦人の型（モデル）も斯くやと思はん計りなるに衣服言語も亦極めて野卑なるものにてありき、されど我が師の夫人に戯れまわることの如何にも激しければ、我等三人は實に見辛らきことにてありき』と、夫人の令嬢ミスポーターは言へり『妾は我が母に博士を引見されたる時は意外の感に打たれたることなかりき、渠が身躰は瘠せ細り其の眼は凹み、其骨は露れて頭髪延び、談話中に突然飛び上りて奇妙なる手似をなし、げにも可笑しき見憎き人なりき』と、渠始めてオーチンレックに住めるボスウエルの宅に行きけるとき、夫人ボスウエルは門外漢の

夫人が令嬢博士の容貌を批評す

ボズウエル夫人が博士許

如く渠を取扱ひ且つ渠に告げて曰く、昔は人熊を使ひたれども今は熊人を使へりとて暗にボスウエルの博士に心醉せるを笑ひき、然れども博士は惡に報ゆるに善を以てせり、夫人ボズウエル宵て病めるときに博士は渠が室を貸し與へんと申送れり、渠は亦轉地保養を勸め且つ其費用をも支辨すべしと告げぬ。

平和なる博士の家庭

要するに博士は婦人の中に育ち、婦人の密を舐めて巧に其の毒刺を避けたる文士にてありき、盲目なる戀の王國に住める夫人は、純粹なる明盲目にして博士は稍之に優れる近視眼にてありき、戀は見惜き渠等が外貌をも極めて美しく化粧したり、戀の眼は五十一歳の老婦をして猶二八の花と見せしめき、故に渠等が家庭には常に花充ちて香氣紛々たる觀ありたりき。

第八章

失戀之詩人

一　ダンテー

詩人と美人ビアトリース

渠は "Vita Nuova" に謂へり、『何時にても彼女の我が前に顯はるゝや、我が心中に燃る慈善の火燄は、我が敵の何人をも忽ち寛恕せんとする念慮を起さしむ』と、彼女とは即ち渠未だ九歳の乳兒たりし時に、始めて其心に描ける美人ベアトリース (Beatrice) にてありき、ベアトリースに對する詩人が愛情はビと清淨なるはなく、彼女に對する詩人が戀情はと悲哀なるものはなかりき、彼女の詩人に嫁したる時には詩人は甚だしく病に犯されてありき、間もなく彼女の病にかゝりて沒したるや、渠が生命は殆と危急を告げ『聞睹共に荒漠に陷りたりきと云へり』"Athing wild & savage to look upon." 渠は六年を經過しグンムマデー、ドナチー (Gemmade Donati) と結婚をなし七人の子女を擧けたりしとは雖も、無論

詩人の後妻ドナーテ

詩人先妻の追想

ビアツリーの如く幸福なるものにてあらさりき、ビアトリースの死は詩人をして社會に最も有益なるものとし、詩人をして人類に彌々純潔なる戀を歌はしめたり、ベアトリースは渠が智力のミユースとなり、渠が心界の天使となりて、渠が遂放に於ても、渠が貧苦に於ても絶へず精氣を賦與して渠を慰め渠を勵したりき。

二　ペトラーク

渠が理想の婦人

一千三百廿七年四月六日に於てペトラーク (Petrarch) はラウラ (Laura) なる一少女に逢へりき、ラウラは如何なるものなるか、未だ何人も彼の女の素性の洗ひ得たるものなしと雖も、兎に角渠が理想のミユーズにあらずして、慥に實顯界に存在したりき一美女たりしこと明かならむ、彼女は既に結婚したる婦人にして詩人に嫁したるものにてはなく、唯單に詩人が弄ぶ純潔なる理想の戀に天降りし天女にてありき、ラウラーは一千三百四十七年に疫病にかゝりて歿したるが、詩人は常に夢幻郷に於て彼女と會合し、彼女が英氣を感受して渠が詩句は彌々純潔なるものとなりきと云ふ。

シエーキスペーア及び其夫人

三　シエーキスペーア

ウイリアム、シエーキスペーアは十八歳にして八歳年長なるアンチーハサウエー (Anne Hathaway) の戀に陷りて結婚するの已なき場合となりぬ、渠はスウサンナー (Susanna) なる長子及びハニテとジユーディスなる双兒を生みたれども、渠が理想の戀は他に存在したりしが故に、渠が結婚の生涯も亦幸福なるものにてあらさりきと。

ミルトン及び其夫人

四　ミルトン

僅に十八磅の原稿料を以て、世界最大の詩篇『失樂園』(パラダイス、レスト) を著はしたるジヨン、ミルトンは、一千六百四十三年卅六歳にしてオックスフォルドシヤーなる地方裁判所法官某氏の令嬢を娶りき、(Mary Powell?) 夏は朝四時

聖家を出離婚論を著す

に起き、冬は五時に起きて中食迄へブリユー聖書を讀みつゞけ、食後一時間の運動をとりたる渠は、夜早く床に就く迄は不絶讀書に耽りたりき、結婚後一ケ月を經て新婦は、何に故か彼女が父母の家にと歸り往きぬ、不平憤懣に遺る瀬なかりき渠は、忽ち筆を取りて『離婚論』數篇を著はし、以て社會が之に對する公平の裁決を覓めたり、或日のこと渠は親戚を訪ひたるに、突然他の室より新婦の出て來りて、渠が膝下に平伏し頻に其罪を謝するに遇ひければ、詩人は竟に其心を解き彼女を伴ひ歸りぬ、其後四人の子女を擧けて產後の經過惡かりき夫人は僅に廿六歲にして永遠の旅路に出て逝きぬ。

詩人が第二の夫人

詩人が第三の夫人

二ケ年にして詩人は船長ウードラツクなる一女キヤサリンなる者と結婚したれども、僅かに十二ケ月にして一子を產み殘し逝きぬ、之れ渠が第二の夫人なり、五ケ年の後にはエリザベス、ミンシユル (Elizabeth Minshul) とて最も口喧しき婦人を娶りたり、バツキンハム侯は彼女を『荊棘婦』と呼べりし程になか〳〵惡癖ありし婦人にてありき、詩人はコ

夫人ミルトンに希望

ロンウエルに擧けられて渠が秘書官たりしが、間もなく之を辭したるに夫人の切なる請求に壓せられて渠は再び之に奉職したりき、詩人は言へり、『爾は馬車に乘らんが爲に我に之を勸むるや、我が希望は正直に住み正直に死せんと欲すなり』と。

五　コーレージ

暴飲暴食而も阿片を喫し、粗豪にして極めて不規律なる生活に其身を崩したる渠サミエル、コーレージは、一千七百九十五年廿三歲にしてサラ、フリツクカール嬢 (Miss Sarah Fricker) と結婚の式を擧けたり、然れども文筆に依て得らるべき收入を以ては、とても渠は其の一家を支へうべかりる資格なかりき、暴飲夜を徹し、阿片の夢に夢みたりし渠は、二人の子供と其妻を養ふ能はずして、其妻なる親戚より救助を仰ぎ、其の友にして兄弟詩人なるサウジーより集められたる寄附金にて、漸く其子を大學に入學せしめたる程に、其身を脩め其家を治め能

サウゼー結婚指環を購求する能はずして結婚式場より還る

ばざりき、斯の如く其一家を養ふ能はざりし渠は竟に其妻と其子を見棄てゝ獨逸に出走するの已なきに至りぬ。

夫人コーレージの令妹エッテス、フリッカール (Miss Edish Fricker) を娶りたるサウジーは、コーレージ一家の面倒を見ることの已むなきに至りしとは雖も、元來渠サウジーも至て貧困にして、渠が結婚せんとする當時は『結婚指環』(マーレージリング) を購求する能はずして、結婚式場たる教會堂の前より獨り新婦を殘して逃走したる程なれば、コーレージ妻子を背負こむことは、渠に取りて極めて重き大荷物にてありき、然れともケスウイックに其の偶居を定めたりし渠には、幸運の廻轉し來りて、コーレージの家庭に比しては遙かに幸福の生活を送りたれども、晩年に至りては最も悲慘なりき、妻子に離れたるコーレージは其後獨逸より歸り來り、ロンドン、ハイゲートなる某外科醫の許にて翌年十九年を支ふべき道を求め、一千八百三十四年齢六十三にして沒しき。

詩人とベルチエス令嬢

第九章

失戀の文豪

一　スコット

グンフリアス會堂將に散せんとして、急雨篠を束ぬて來る、佳人雨に惱みて歩み得ず、時に一少年傘を與へて、彼女が兩親の許にと送り屆けぬ、佳人はマーガレット、スチユアート、ベルチエス (Margaret stuart belchls) とて其身富家の家に生れ、教育充分に而も文才に長し、容顏華麗愛嬌溢れんばかりの令嬢にて、一少年は即ち大文豪ソル、ウオータル、スコットにありき、時に渠齡十九歳燃えんばかりの名譽心を抱きたる一個の法學生なりき。

スコットの母は既に令嬢の知己にして、其學才と風采に心醉し居りたることなれば、彼等青年男女の交際に殊更に大なる便宜を與へたり、此の交際によりて學業の上に活氣を帶ひたるスコットは、アダム、フ

ベルチエス約に背きて他人に嫁す

オルギユメン等が設立せる文學會に入り、亦其友クレークと共に父を扶けて日々議院に出頭したり、十九歳より廿四歳に至れる六ケ年間の永き年月をば、ベルチエス嬢との結婚成し遂げらるべしとの希望を抱きて、渠が業務の上に万斛の熱血を灑きたる渠は、一千七百九十七年一月十九日ベルチエス令嬢はスコットニ來らずして、ピッツリゴ Fitzligo の男爵ウイリアム、フオルベスに嫁したるを見て殆ど卒倒せんばかりに失望したりき、其後渠は其友に語りて曰へり『或夜舞踏會の一隅にて、滿場の佳人才子跪ね廻るまに、時の過きゆくを知らずして、我等互に語り合へりしことの如何に樂しかりしかよ』と、『我は彼女が書翰をば、日々操り返し操り返へしつ、殆ど十回以上も讀み續けたり、彼女が忠誠にして信實なる行爲に依りて、我が心に懸りし、卑しむべき疑惑の念慮をば甚く愧ぢたり、××××××』と、斯の如く渠は令嬢を慕ひ居れるに、如何なる理由の存せしかは知るを得ざれとも、令嬢が突然の變心に遇ひて、如何に渠が失望の深淵に沈みたるか念ふ可し、

詩人が初戀の追想

詩人初戀の老母と語る

其後三十年を經て渠が名聲全歐州を震盪せし頃、シヤンドウイツク、プレース六番地に冬期間其居を移したることありき、渠は爰に移りたると間もなく、渠が偶居より程遠からぬ所に、初戀ベルチエスが老母の住み居るを聞き、其友スケチー夫人の紹介によりて老母に會ひ、親しく昔を語り合ひて、共に懷舊の涙に呉れたりきと、初戀マーガレット、ベルチエス嬢は彼女が約に背きてフオルベス夫人となりし十三年目、即ち『湖上の佳人』發行後間もなく思はぬ病にかゝりて歿しき、之より前き一千八百廿五年渠か關係せる出版會社倒産して、渠は莫大なる負債を生したるとき、夫人の勸誘によりてフオルベス男爵はスコットが財政の危急を救ひたることありき、十一月十日正午渠は在りし昔を物語りせんとて再び老母が許を訪ひけり、涙に咽びし老婦は渠が成功を欽慕し、フオルベス男爵に嫁したりし老婦が令嬢の死を悼みて、老人が常なる愚痴を溢したるが、渠が晩年に及びても猶忘る可からざることとは、當時老婦と語り合へりし物語なりとぞ。

奇遇は奇縁と聖し佛國亡命紳士と婚す

初戀の令嬢フオルベス夫人となりし六ケ月後、即ち一千七百九十七年七月渠が淋しき心を慰めんとて英國某湖邊に漫遊しけるとき、馬に跨りたる一佳人の湖畔を過ぐるに遇へり、其夜渠は舞踏會に於て再び彼女に逢遇したり、令嬢の父はカーペンテールとて佛國革命に組みして戰死し、母と令嬢は難を英國に避けたるものてありき、此夜渠は令嬢に紹介され、奇遇は奇縁と變して竟に渠が階老の友とはなりぬ。

夫人が寡婦

失戀の詩人得意の人となる

渠が兩親は佛國亡命者と結婚することをば著しく非難したれども、渠等は一千七百九十七年基督降誕日の夜、セント、メリー教會堂に於て竟に結婚の式を擧け直にエデンバラに歸りて南キヤスル街に其の住所を定めたり、开が茶褐色なる眼眸、そが概慨色なる容貌、开が綠滴れんばかりなる綠髮は、初戀のベルチエス嬢とは大に異る所もありて、著しく詩人が眼を悅ばせたり、加之彼女は一ケ年五百磅の收入あるべき權利を所持して、滑かに夫の財政を助けたれば、失戀の詩人も今哉得意の人となり、渠等の間に四人の子供を擧け、齡六十一歳にして竟に此世を去りぬと。

亡妻紀念の著書顯はる

二　フイルヂング

ヘンヘリー、フィールディングは容姿艶美にして、資產も亦寡からぬクラドック嬢なるものと結婚の式をば擧げぬ、夫人は此家政に無頓着にして所謂『ベニソンバスチーとシャンパン酒に對しては如何なる義務をも亦如何なる心痛をも忘却するてふ夫の伴侶たりしことなれば开が生活の何で樂しかる可き理あらんや、嬢の死去するに及びてフィールディング大いに失戀の嘆をなせしが間も無く夫人が愛みつゝありき侍婢と婚するの已むなきに至りぬ、渠は謂へり『是れ我が涙を拭ひ、彼女と共に死せる天使（先妻の事）が追悼に供せんが爲めなり』と料らざりき彼女は後にフィールディングが後妻となりて賢女の擧彌々高かりき、渠はその青春時代に於て苦難を共にしたりき先妻に報ゐんが爲めに高貴にして而も不滅なる紀念碑を著しき、即ち彼れは此情事を骨子として

奇遇は奇縁と變し佛國亡命婦人と婚す

初戀の令嬢フォルベス夫人となりし六ケ月後、即ち一千七百九十七年七月渠が淋しき心を慰めんとて英國某湖邊に漫遊しけるとき、馬に跨りたる一佳人の湖畔を過ぐるに遇へり、其夜渠は舞踏會に於て再び彼女に逢遇したり、令嬢の父はカーペンテールとて佛國革命に組みして戰死し、母と令嬢は難を英國に避けたるものてありき、此夜渠は令嬢に紹介され、奇遇は奇縁と變して竟に渠が階老の友とはなりぬ。

夫人が寡婦

渠が兩親は佛國亡命者と結婚することを喜ばず、渠等は一千七百九十七年基督降誕日の夜、セント、メリー教會堂に於て竟に結婚の式を擧け直にエデンバラに歸りて南キャスル街に其の住所を定めたり、开が茶褐色なる眼眸、そが概欖色なる容貌、开が綠滴れんばかりなる綠髮は、初戀のベルチェス嬢とは大に異る所もありて、著しく詩人が眼を悅ばせたり、加之彼女は一ケ年五百磅の收入あるべき權利を所持して、滑かに夫の財政を助けたれば、失戀の詩人も今哉得意の人となり、渠等の間に四人の子供を擧け、齡六十一歳にして竟

失戀の詩人得意の人となる

に此世を去りぬと。

二　フィルヂング

亡妻紀念の著書顯はる

ヘンヘリー、フィールディングは容姿艶美にして、資産も亦寡からぬクラドック嬢なるものと結婚の式をば擧げぬ、夫人は此家政に無頓着にして所謂『ベニソンパスチーとシャンパン酒に對しては如何なる義務をも亦如何なる心痛をも忘却するてふ夫の伴侶たりしことなれば开が生活の何で樂しかる可き理あらんや、嬢の死去するに及びてフィールディング大いに失戀の嘆をなせしが間も無く夫人が愛みつゝありき侍婢と婚するの已むなきに至りぬ、渠は謂へり『是れ我が涙を拭ひ、彼女と共に死せる天使（先妻の事）が追悼に供せんが爲めなり』と料らざりき彼女は後にフィールディングが後妻となりて賢女の擧彌々高かりき、渠はその青春時代に於て苦難を共にしたりき先妻に報ゐんが爲めに高貴にして而も不滅なる紀念碑を著しき、即ち彼れは此情事を骨子として

彼の有名なる「アメリア」てふ小説を物しき、汙が中に描ける女主人公即ち其先妻なる者が放埒遊蕩なる夫ブース（即ちフィールディング）に對して忠實柔順なりし事蹟をは巧に描寫したるものにてありき。

三　ラスキン

ラスキンが不幸の死

十九世紀の中天に煌々明を爭ひたる幾多の文士は、既に西山に沈して殘光今や凋落せんとするに、獨りジョン、ラスキンのみに踏み止りて汙が光明を輝かしたりしが、天、齡を彼に貸さず、一千九百年正に八十一歳、正月廿日を最後の日として Coniston 湖の邊り、溯水涓々流れ落つる所、閑靜優雅の田舍家に、偕老同穴の妻なくして獨り淋しく眠り逝きぬ、哀れなり爾か生活の半面は事實に於て暗澹たる闇の夜なりき、千八百七十年始めて Oxfold 大學に美術の教授たるや、聽講者堂に溢れ亦如何ともし難けれは、同一の講演をは二回に配ちて、纔かに其滿足を充しぬと、爾來十四年間再三撰はれて教授の職に就きしが終に一千八百八十四年病を以て辭任したりき、之れ彼が名聲の赫々たりし日なりき、然り彼が名聲の太陽赫赫照り輝きたると同時に、其半面に於ては悲哀の暗影彌々黑みゆきつゝありき、頭髮霜を戴き身體思ふ如くならす、健康日々に衰へ行くに、老後の快樂を共にすへき彼か最愛の妻は、彼を見棄てゝ或る名高き畫工の妻となり居りぬ。彼は決して之を苦に病まさりしかと、深く其の中を察せは吾人は何そ一滴の涙なきを得んや、齡甫めて十七、佛國人なる一小女を愛し、畢生の血を絞りて短編の詩を送りたれとも之に對する彼女の態度は至極冷淡にして一片の返翰をも與へす、男爵某氏と結婚して甚たしき恥辱を加へしかは、彼か不滿の情火は一條の火焰となつて殆と彼を燒死せしめんとしたり、然れとも彼は汙か失望に沈ますして、忽ち其方向を變し滿腔の熱情をは彼か學業の上にと注きぬ、一千八百四十一年、芳紀正に二七、春花燃んはかりなる蘇國の一小女を見て、"The King of the Golden River" を草し、一千八百四十七年 Ruskin 兩親の勸誘に因りて此の一小

ラスキンの妻畫工に通ず

齡十七歳佛國の少女を愛ふ

蘇國一美人に捧ぐ詩篇を呈す

渠は生活調度總て無頓着なり

女を迎えて彼か最愛の妻こはなしぬ、時にラスキン二十九歳Bride將に二九玉貌嬋娟梅花既に蕾を破て芬香黄昏を呼ふの齡、其身富豪の家に產れ、未た世の醜風に當らされは彼女の欲する所は單に"gay world"なるのみなりき、彼女の希ふ所單に"brilliant and pleasurable society life"なるのみなりき、然るにRuskinは其身を飾らす、生活調度總て無頓着にして、書籍、彫刻的道具、繪畫の器具等の外何物も彼か眼眸に映するものあらさりけれは、新婦新夫の間焉んそ互に相樂しかるへきの理あらさらんや、彼かSweet homeたるへきもの却てgloomyと變したるこそ是非なけれ、今やラスキン夫妻の心情隔離甚たしく憂鬱日々重り行きて終に離婚の沙汰とはなりぬ、居ること七年妻はラスキンを棄てゝ去りぬ、其後彼は己か弟子なる一婦人に親み婚議の約正にならんとするに際し、婦人宗教の迷信は再ひ彼を拒絶するの已むなきに至れり、或日ラスキン書を送り「我れ世界に於ける何物よりも猶よく爾を愛す」と云へりき、斯の如き言は其戀人をして悅はしむるものなるに、彼女は

夫妻の心情隔離甚しく竟に離婚となる

婦人の迷信詩人を困らす

迷信の婦人病死す

却て之を苦に病みて念へらく、彼は己れか信仰する神よりも猶よく我を愛すと言へは、彼は業に神を離れたるもの即ち不信徒なるもに均し、彼と我れとの婚儀は正しく之れ神を離るへきものなりとの迷信に伴はれて終に彼を拒絶し、苦に惱みて病床に伏する三年生命正に旦夕に迫るに際し、ラスキン言葉を卑ふして今一度彼女に面會を乞ひたりしか、"her door was closed upon him everlasting"彼女の門戸は永遠無窮に閉されて再ひ彼を容れさりき、嗚呼哀れなりRaskin!噫之れ何んたる慘事そや、世界何人か能く其涙を禁せさるものあらんや、世界何人か能く其涙を禁せさるものあらんや。

四　ヂッケンス

Charles Dickensは一千八百十二年二月七日英國Landportに生る、父は海軍省主計課の書記にして、至て親切なる者なりしかど、其妻と八人の子供を養ふの困難なるが爲に、貧窮と債鬼は渠が周圍を纏ひて去ら

ディケンス幼時の困難

夫人ディケンス私塾を開く

父は負債の爲に牢獄に繋がる

さりき、Elizabeth Barrow なる母は稍々教育ある婦人にてありければ、負債の囚人となりたる夫を救はんとする傍ら、八人の子供を教育する。に餘念なかりき、渠二歳のとき家族は London に移りたりき、Dickens は病身にして隣家の子供等と遊び戯ること能はざるが爲めに家にありて繪草紙など散見すを最上の樂とはしたりき。

父は不如意に不如意を重ね、場所より場所に移りて終に London 市北 Gower 町四番地に借家しぬ、浮世の戰に勞れ果てたる夫を助けて母は、"Mrs. Dicken's Establishment" なる看板を掲けて私立學校を開き、九歳なる Chailes Dichens は廣告紙を撒布しつゝ渠が遊び仲間に學校に來れよと勸むれども、誰一人來り學ぶ者もなく、貧は貧を重ね、涙は涙と混して、渠が家族は夕飯に一片のパンを得るたに困難なるに到りて無慘なるかな、父は牢獄に繋がるゝ身となり、家具は食を得る爲に一亦一と消え失せて、此の宏き世に家族九人は丸裸躰となりて投げ出されぬ、其後數ケ月を經て父出獄して自由の身となり、住居は Little Callege Street に移され、小僧に行きたるチャレーは家に歸りて Wellington House Academy に通學するの身とはなりぬ、母の衣服調度を賣り拂ひて得たる僅少の學資は、數ケ月の在學をも支え能はず、退校するの已なきに至りて、

ディケンス中學に入る

雜誌通信助手となる

"Morning Herald" なる雜誌の通信助手となり、一ケ月十三シルリングの俸給を得て、渠は家計の幾分を扶け得たりきと云ふ、其後渠は困難に困難を重ぬ苦學に苦學を重ねて、遂に天下有名の作者とはなりぬ。

ジッケンス結婚の式を擧ぐ

一千八百三十六年ディッケンス廿四歳にして、渠が隨事せる每夕新聞社員ジョージ、ホガルス (Ghege Hogarth) 氏の長女キャサリンなる者と結婚の式を擧げぬ、或人ジッケンスの母に書翰を送り新婦を紹介して曰く、『新婦は何れの男子にも好かるべき、二重瞼の大なる眼にて、口は小さく丸くして口唇赤く、愛嬌溢れんはかりに、身の丈け低き婦人なり』と、

一寡一愛渠が家に起る

一千八百三十七年はジッケンス家族に喜憂を混合せる事件起れり、一は渠か長男チャルースの生れたることにして、一は夫人か令妹メリーの突然死去したることにてありき、ジッケンスか次きなる弟ブレッドと夫

チッケンスが理想の妻

人か次きなる妹メリーは、チッケンスか夫妻と共に住みたるか、當時メリーか齡正に二八、紅顏色あさやかに、朱唇皓齒而も肌は雪を欺き、一笑百媚生れ、一憂城を傾くるか如き、絕色天下に稀なるものにてありけれは、集ひ來る文士の多くは私に彼女か絕色を愛てける中にも、主人チッケンスは殊更に之を愛して渠か理想の妻とはしてけり、然れは夫人キアセリンあれとも無きか如く、來客の應接は勿論万事は總てメリーか掌中のものにてありき、同年五月七日自然の庭園は紅紫爛熳として花咲けるに、チッケンス家庭には狂風俄に吹き起りて、一輪の名花未た滿開に至らすして、一夜の中に散り逝きぬ、チッケンスは彼女か母に送りて曰く『死去後我は彼女か指輪を一刻も我か手より離せしことなし、歩むにも眠るにも、彼女か面影の我か想像裏に顯れて、我は我かものに非さるか如く、眼に睹、耳に聽くもの、總て思の種とならさるはなし』と、

一千八百四十七年の春渠か住宅はレゼント公園チエスタル、プレ

キャサリン、チッケンス家を去る

スに移され、其所にて渠か第七子シドニー、スミス、ヘルデャンド生れたり、斯の如く渠は七人の子女を擧けたるにも係らす、キャサリンと渠か間は思ふか如く睦ましからす、不平と猜疑は互に往來交換して、一種の暗流は渠等胸中に流れたり、渠は言へり親友フォスターに『We are not made each other. 我等は如何にしても所謂「性あはす」と』、竟に最も悲むへき事情の下に、キャサリンは年々六百磅の支給金を諾し、長男チャールスに伴ひて永久渠か家をは去りぬ、

五　ウィリアム、サッカレー

『ヘンリーエスモンド』及ひ『ヴァニチー、フエーア』の著者として普く我か學生間に知らるゝ渠は、十九世紀の中葉英國文壇に於てチャールス、ヂッケンスと相並びて其の文名最も高き文士なりき、一千八百十一年カルカッタなる名族の中に生れ、幼少より秩序正しき教育を受けて後ちケムブリッヂなる基督教大學に入りしか、程なく退校して佛

サッカレー畫工たらさして失敗す

都巴里に遊ひ、畫工たらんとせしか其身を過ちて悉く資産を失ひ、後ち志を改めて文筆に從事する事となり、各種の雜誌社に入りて巧みに諷刺の筆を振ひたりき、渠正に廿四歳なりし時イサベラなる者を娶りしか、其三女の生れし時夫人イサベラ一種の精神病に罹りき、爾來病勢益々重り往きしを見て、夫サッカレーは日夜彼女の傍に侍し、懇ろに看護の勞を取りたりと云ふ、渠は友人に書を送りて云へり、『我か結婚の生活は極めて悲慘なるものなりしかと、我れは再ひ之を履まん事を望めり、何ぞなれは神聖の戀愛なるものは現世に於て最も圓滿にして而も最大なる幸福なれはなり』と、素と是れ渠れは情の人なり、渠れは其筆と其行爲に於て全く正反對の性質を帶ひにき、見よ、筆に現る渠か面影は殘忍なる形迹の幾分を現すか如くなれと、日常の行爲に於ける渠は最も愛す可く又敬す可き仁慈の人なりしに非すや、渠の友某曾て書して云へり『サッカレー沒して後ち數日ならすして我は或る街衢を歩みける折り、某繪入雜誌の街頭に懸かり居りけれは近付き

素と之れ渠は情の人なり

渠は其筆と其行爲に於て相反す

デッケンスが追悼文

見たるに、婉麗なるデッケンスか筆もて彼れか吊悼文を掲載しありたり、猶熟談せんとして思はす之に近付ける時垢浸みたる仕事衣を着けたる一老爺、予か傍に來たり吊悼文を眺めつゝありし我れを見て云へり、「卿よ我れ其人を知れり」我れ曰く「汝は其サッカレーを知れりや」老父曰く「我れ能く渠れを知れり、渠日毎に我か家（彼方の麵麭店を指し）に來たりて、幾許かの麵麭を購ひ、路傍に彷徨へる乞食共に分與し呉れよと言捨て置きて、渠自身は彼方の路次口に其身を隱すを常としけり、世人は此人をは刻薄なる渠刺家なりと呼べとも渠は斯かる人には非すして、實に慈愛に富める慈善家なりき』と。

渠は慈善家なり

六　ロード、リットン

リットル及ひ其母

エドワード、バルワー(Edward Bulwer)後日リットン公となりたる渠は曾て其母と文學茶話會に出席したる事ありき、其時母は突然渠を顧みて曰く『オヽ、エドワードよいかに類稀なる美人ならすや見よ抑も

リツトン女文士と結婚す

彼女は誰れならんか』と、此美人はフランシス、ホイーデァ(Francis Wheder)の令嬢にして其名をロジナと言へり、渠の友等は彼女の性質の彼れに合はすして極めて神經過敏なるものなりければ、其結婚を思止めさせんとて渠に忠告したりしとは雖も渠は一千八百廿七年に至り竟に彼女を娶りき、當時女流の文士として其の筆彼女に及ふものなかりければ夫人バルワーを助けて开か著述に少からさる便宜を與へきと云ふ、然れとも其性情の合致せさる夫人は遂に互に相分離するの已む無きに至れるを如何せん、離別の後夫人は『光榮なる生活』てふ一書を物し盛んに先夫バルワーを罵つて曰ひけり『彼れは狡猾にして而かも殘酷なる節操無き僞人なり』と、其後渠バルワーか國會議員候補者となり議員選擧場に施て演説しつゝあるや、夫人突如として入り來たり渠れか演説の終るや否や大聲を發して夫人かバルワーと共にありし當時の最も忌む可き秘事をは悉く暴露したりとなん、噫何そ夫れ恐る可きの婦人ならすや。

夫人其夫を罵る

バルワー夫人の妻言

七　ドライデン

十七世紀英國桂冠詩宗にして而も梨園の作者たりしジョン、ドライデンは一千六百三十一年ノサンプトンショアなるアルド井ニクルに生れき、渠はツリニチー大學の立身者にして、士爵ピッカリーの秘書官となり、間もなく辭して文壇に上り、劇場の脚本作者となりき、其頃ボルクシャール伯爵の令嬢エリザベス、ホワルド(Elizabeth Howard)なるものと、双方にて余り賞す可からさる事情の下に("With circumstances not very honourable to either party")結婚したり、彼女は不注意にして無頓着なる詩人を非難し、『妾若し書籍にてもありしならは少くとも猶渠か幾分の注意を惹きたりしならんに』と、謂ひけるに、詩人は『若し書籍ならは年々變るべき暦本(アルマック)たらんことを望む』と答へけるか开か言葉より鑑みれは渠等か結婚生涯(マリエーンドライフ)も亦幸福なるものにてあらさりきや明けし。

八　ヤング

『夜想』（ナイト・ソート）の作者エトワード、ヤングは、リッチフィル伯爵の令嬢にしてリー大佐の未亡人と結婚せり、夫人沒して後渠は非常なる失望に沈みき、ヤングは先夫の遺子二人を引取り、懇に之が教育に務めたりきと、渠も亦失意の詩人なりしならんか。

親友のカルベルトの思澤

第十章

平和の詩人

一　ウオーズウオース

『夕べの霞のとかに湖岸を渡りて、對面の峯巒模糊たる時、獨り水涯を徜徉し、書齋の硝窓に燈火のあらはるゝを見て家に歸れば、可憐の少妹は之を迎へ、斷琴の愛は渠を待つ』（坪内博士英文學史）實に之れ渠が親友カルベルト氏（Corvert）が思澤に依りて、生活し得らるべき平和の生涯なりき、之より前渠は佛國に渡り、失意の人となりて歸國し、忽ちパンに窮して小妹ドロシー（Dorosy）嬢と共に甚く其の心を腦まし、舊稿の詩數篇を著し、焦眉の急を救はんとしたりしかども、得る所僅少にして增々窮境に陷りたる折柄、親友 Raisley Covert なる者肺に病みて既に起つこと能はず、贈るに金貨九百磅を以てし、衣食に齷齪たらすして渠が詩人たるの天職を完からしめんことを望めり、隨喜の涙を以て之

を受けたる渠は、報るに死を賭し以て渠か Poetic Mission（詩人的天職）を完ふせんことを期したりき。

一千七百九十五年少妹ドロシー嬢と共にレースドーン(Racedown)に移り、翌年クワントック、ヒル、(Quantock Hill)の近傍ソメルセットセアー(Somersetshire)なるアルフオックスデン(Alfodden)に轉す、爰に渠は生涯の友コーレージと相知りして住みにき、アルフオクッズデンはクワントック、ヒルの麓にありて、一條の溪流岩石を滑り下流瀑布となり、巨木倒れて自然の橋を架し、綠葉之を覆ひて陰暗く、雜花之に交りて溪流喋々の聲高く、空氣清涼實に之れ自然の仙鄉にてありき。

コーレージと詩人

一千七百九十九年少妹と共にグラスメールに移り、一千八百二年八月四日齡三十二にしてメリー、ハッチンソンを娶る、之より渠は少妹トロシー及ひ最愛の妻ハッチンソン、並に幾多の詩友に圍まれて、高遠なる理想的詩人の生活に踏み入りぬ、渠はサウゼーの如く良き夫良き父にして、實に慈愛と平和に富める家庭の模形を作りき、ジョンを長

ハッチンソンを娶る

男に五人の子女を擧け、一千八百十三年の春浮世を終る最後の場所として、ライダル(Rydal mount)に退き、春の日のどかに啼く雲雀天に冲するを見ては、To a skylark 雲雀に與ふ短詩を賦し(中學英文臨時增刊紅葉蘭漫に載せたる余か注釋を見よ)サウゼー、デ、クインシー、コーレージ其他の湖畔文士に圍まれ、一千八百三十九年オックスフオールト大學よりは民法博士の學位を贈られ、仝四十二年時の政府より桂冠詩宗の榮職を授けられ、一千八百五十年四月齡四十八にして、自然の寵兒は亦も元の自然の土にと歸りぬ。

民法博士の學位をうく

二　アルフレッド、テニソン

桂冠詩宗ウオースウオーズ歿して之か繼續者を選定するに際し、夫人ソラウニングか競爭に勝を制し、竟に十九世紀英國の欽定詩宗となりたるアルフレット、テニソンは、一千八百〇九年八月六日英國リンコルンセエアなる一村サンマルスビーに生る、父は D.C.L. なる博士號を有する宣教師にして同村寺領の監理者、母はエリザベスとて某教會

牧師の女なりき、男七人女五人なる兄弟中にて渠はフレデリック及ひチャールスなる二人の兄を頭に、共に文學に志したる三人兄弟の詩人にてありき。

ドラモンド、ラウンスレなる一牧師は言へり『村落は三人兄弟詩人の住家としては最も適當したる所なりき、繁れる森の陰暗き所には幾條の溪河繞り流れて、名も得知らぬ山草の根を洗ひ、囀へつる鳥の聲は溪間に響き合ひて詩人の心を悅はしめ、北は曠原にしてセットフオールに登る山道の、恰も蛇の匍ひ上るか如き狀形を畫し、南は斜めに自然に下りて野原は人工を以て造りたる一公園の如き風景を存せり』と、詩人も亦オード、オフ、メモッリー、(懷古の頌)に歌へり。

"Thou wert not nured by the water fall which ever sound and shines.
A pillar of white light upon the wall of purpl—cliffs also discribed:
Come from the woods that belt the gray hill side,
The seven elms, the poplar four
That stand beside my father's door,
And chiefly from the rook that loves,
To purl o'er melted cress and ribbed sand,
Or dimple in the dark of rusely coves,
Drawing its narrow earthen urn, in every eldon and turn,
The fittered tribute of the rough wood land."

カーライルと喫烟の競爭をなす

一千八百二十七年兄チャールスと共にケンブリッヂなるツリニチー大學に入り、間もなく懸賞詩篇に當選して名譽の金牌(ゴールドメダル)を得たりき、渠はサッカレーの如く業を終へずして校を退き、家にありて其母及び小妹等と共に、自然の風景と文學の研鑽に餘念なかりき、一千八百三十八年當時の文士カーライル、ミル、サッカレー、フオスター、及ひランドソル等か組織せる文學倶樂部アノニモス(其後スターリングと改稱す)に入り、毎月一回出席して爰に文學哲學上の議論を闘はしたし、且つカーライルと共に喫烟の競爭をもなりたりき、カーライルは米のエマ

ルソンに送りて曰く、

"Alfred is one of few British and foriglin figures who are, and remain, beautiful to me—a true human soul, * * * * However, I doaft he will not come; he often skips me, in these brief visits to town; skips everybody, indeed; being a man solitary and sad—carring a bit of Chaos about with him, in short, which he is manufacturing into Cosmos."

詩人の容貌

渠は亦詩人の容貌に付て言へり

『渠は世界に於て最も立派なる人の一人なり、渠か額は廣く且つ大く頭髪長く垂れ、口髯生へ繁りて、顏色暗黃色又印度人の如く、衣服は極めて緩く自由に不絕煙草を喫し、談話の口調は音樂的にして最も高く笑ひ、幅廣き帽子を冠りて傲然として往來する渠を見れは、一見將來渠か大人たるを想像するに足る』と。

セルウード嬢を娶る

一千八百五十年テニソン四十一にしてヘンリー、ソウードの女エミリー、セルウードなる者とオックスフオールトセ！アなるシップレーキ教會にて結婚の式を擧けたり、翌年三月六日渠はバッキング公宮殿に召されて女皇に謁し、ウオーズウオースか繼續者たるへき挂冠詩宗に勅選せられたり、同日テニソンか參朝の服裝はウオーズウオーズか纏ふたりしものと寸分の相違なきものなりきと、

詩人女皇に謁す

渠は曉年に及むてサッカレーと最も親密なる交際を結ひき、一千八百六十八年には米の詩人ロングフエロー渠を訪へりき、是より先きナタナエル、ハウソルンも亦渠を訪ひたるか何故にか渠は自から詩人たることを秘したりきと云ふ。

米詩人ロングフエロー及ひナタエル、ハウソルン詩人を訪問す

『一千八百九十二年十月五日齡八十三歲にして沒しぬ、遺骸は彼のシエーキスペーヤ、アヂソン以下歷代の詩人英雄の墳墓あるウエストミンスタル、アベーに葬られ、前古未聞の莊嚴華麗なる碑は此の大詩人の爲に建られたり』（坪内博士英文學史）

夫れ斯の如く渠か生活の航路は極めて平穩無事なるものにてありき、渠か亦文壇に顯はれて竟に勅定詩宗となりたる道路も亦極めて平垣な

なるものにてありき、故に渠か家庭も亦清涼掬すへき、眠れる湖水の如く聊も動搖せさりき、實に渠は平和の詩人にして其名も平和に長へに傳はらん。

三　ロバート、ブラウニング

詩人の幼稚歌壇

晦澁（オブスキュリチー）を以て有名なる渠は、一千八百十二年五月七日ロンドンの近郊キャンバルウエルに生れき、詩人の齢三十なるときには渠か父は、彼の世界有名なる大富豪ロスチャイルド家に、最も信用を有したる書記の一人にてありき、

シエレーの愛讀者

渠か幼年の頃は音樂をは最上の慰みとなし、且つ自らも音樂を以て其身を支へんと決心したるか、十四五歳の頃より文學に志し竟に詩人とならんとして、日夜文學書を耽讀したりき、其中にて最も意を注きて通讀したるはシエレーの詩集なりきと、渠は何故にか小學にも中學にも入すして專ら家庭に於て开か教育をうけ、其後渠はロンドン大學に入校し、業を了へる前に歐洲大陸を漫遊せんとして、先つゼノワ、フロレンス、ローマ等を遍歴したり、二十歳のときには伊國にありて古代の美術自然の風景等に其眼を曝して除に未來の詩想を錬りにき、一千八百三十三年齢二十二歳なる時甫めて『パウライン』なる詩集を發行す、渠か特色とすへき(?)晦澁は此詩篇の中に充ち滿ちたり、一千八百三十五年交易商なるマックレデーなる者の請を見れて『ストラフオルド』なる歴史的脚本を書き、一千八百三十七年コベント公園に於て興行したるに仲間爭ひ起りて五日目に其興行を中止したり、其後『ストラフオルド』なる演劇は再ひ劇場に上らさりきと云ふ。

渠は脚本に失敗す

年長なるハーレット婦人を娶る

一千八百四十六年渠は六年自己より年長なるエリザベス、バーレットなるものと結婚したり、彼女は西印度某地の領主にして家産豊なる者の令嬢なりしか、家人か不承諾をも顧みす、亦幾百の結婚（キャンサイト）申込人を排斥して自ら選定したる夫なりき、彼女は言へり『夫の晦澁なることは何人も認むる所なるも之を了解せん者は妾か外に一人もあるなしと念

ふ、妾は内部に於て渠と共に住み親しく渠か呼吸を聽きたれはなり』と結婚後間もなく、渠等はイタリーに趣き、夫と共に其の病を養ひ、一千八百六十年一子を後にして渺然不歸の客とはなりね。

渠は夫人ブウニングか葬儀の日に己か室内を歩みつゝ、一篇の追悼詩を携へ、棺の側近く到りて恰も活る夫人に語るか如く語り、其原稿もて夫人か棺を覆へり、棺はハイグート、セメトリーに送られて後六年内務省の許可の下に採掘せられ渠か追悼詩は世に公にせられたり。

夫人ブラウニングの死して其人追悼詩を草す

四　レイ、ハント

『エキザミナー』なる定期刊行雜誌を十四年間繼續發行して、健筆の名を著したりしレイ、ハントは、さして美人と云ふ程にあらねとも、容色先つ十人並なるマリアン、ケントなる者を娶れり、此女最初の内は寇に好箇の世話女房にてありしか、兎角病ひ勝ちにてありけれは、渠ハントは充分なる家庭の快樂を得る能はさりしなり、彼れ曾て野に出てし時金色せる毛莨の咲けるを見て、是れ若し金貨ならんにはとの歎息を發せし事にしわれは、當時渠か家計の豊ならさりしや明らけし、エルミアに於て渠はカーライルと相隣して住にき、故に両文士は相往來して親密なる交際を結ひきと。

渠は毛莨を見て黄金なれかしと云ふ

五　デ、クインシー、

オクスボート大學の立身にしてロンドン某雜誌の寄書家たりしデ、クインシーは、結婚生涯に於ては最も幸福なる人なりき渠はウエルトムーアランドなる一紳士の令嬢マーガレット、シンプソン(Margaret simpson)なる者をは意中の人として久しく樂み居りしか、一千八百十六年遂に彼女を娶る事となりて正式の結婚式をは擧けぬ、彼女は良妻なる而已ならす、容色も亦十人並より勝れ殊に鴉片喫人にして而かも奇癖ある良人デ、クインシーに仕へて柔順なりしかは、渠等か家庭は所謂スキイト、ホームを作り居りし事や明かならん、渠は言へりき『我れ若

し我か妻の助けなかりせは仕拂請取等の仕末如何ならむか、彼女若し之を整理せさりしならは我か家政は亂脈紛離の裡に葬られしならむ』と。

六　ホッダ

ホッグは云へり『古今の詩人中末た全く女性との關係を有せすと云ふもの非さるなり』とけに渠は生涯女性を自己か無上の伴侶として送りぬ、渠か自己の詩中に歌へりし事共は、彼れ自身か經驗の表白に過きさりき、渠曾て歌ふて曰く『さち辛き此浮世を渡るに女性の道伴れなくしてやは、けに女人は平和の慰籍者……』とホッグか妻なるものは容顏衆に勝れ殊に門地も高かりけれはホッグは身心を捧けて妻女か忠實の友となりけるに依り琴瑟優に和して誠に多福なる家庭を作りたりき、此女性か名をフィリップ、マーガレットと呼ひて數限り無き仇し男には目も呉れす、十年の永き月日の間絶えすホックの許に而已切なる思ひを訴へつつありしか彼女か可憐の願ひ叶ひて婚姻の約ひ整ひたりしか、いさ婚儀の式をは張らんとせし際に至り、資金漸く盡きて皆々花嫁か式上の衣服抔に付きては大いに心を痛めたりとなん。

七　ケームル、

トーマス、ケームルかそか妻女の事に付きジェハレー侯に呈せし書翰あり、之に依つて見れは渠か自己の妻女に對していかに優しき夫たりしやを判知するに足る可し。

ジェハレー侯閣下

『今朝小生か過去の愉快と現在の心痛とを以て頻りに腦裡を錯亂せしめられありし時突然にも貴翰に接し直ちに拜誦仕候、實は荆妻儀一子を舉け申候譯にて產後の身体只今いかにも危篤の陷り申候、若し能り間違ひ候時には小生は小生か一生中の最大幸福をそがれ申候やうにも思はれ心痛此上無き儀にて候、小生はここ四日四晩

の間は一時間たりとも睡眠仕らさる次第にて夫故か舌や咽喉のわたりは絶間なき口熱もて殆んと焦け付き居申候、色々成ささる可からさる緊要の事も有之候へ共如何にも胸噪き心落付き申さす今ははや何事も手に付き申さす候』云々

詩人と戀 終

明治三十四年九月十五日印刷
明治三十四年十月一日發行

著者 東京市神田區西小川町一丁目壹番地 關貢米
發行者 東京市神田區雉子町卅二番地 山本鐐藏
印刷者 東京市京橋區入舟町五丁目壹番地 岩井熊藏
印刷所 東京市京橋區入舟町五丁目壹番地 合資會社榮文舍（電話新橋一七三九番）

不許複製

發行所
東京市神田區雉子町卅二番地 特電話本局一四八番 岡崎屋書店
東京市本郷區本郷六丁目 岡崎屋書店
東京市本郷區眞砂町三番地 岡崎屋書店

岡崎屋書店出版圖書賣捌所

東京市神田區　中西屋書店
仝　日本橋區　丸善株式會社
仝　神田區　開進堂
仝　仝　三省堂
仝　仝　敬業社
仝　仝　上田屋
仝　仝　東京堂
仝　仝　有斐閣
仝　仝　金刺書店
仝　仝　脩學堂
仝　仝　敬文堂
仝　仝　東華堂支店
仝　日本橋區　大倉書店
仝　仝　青木嵩山堂
仝　仝　小林嵩山堂
仝　仝　林平次郎
仝　仝　青野友三郎
仝　仝　至誠堂
仝　京橋區　目黑書店
仝　仝　服部書店
仝　本郷區　三河屋書店
仝　仝　田中書店
仝　仝　盛春堂
仝　仝　大和屋
仝　牛込區　盛文堂

東京市芝區　福島屋
横濱市　丸屋書店
仝　弘集堂
仝　倉田屋
仝　勉强堂
仝　師岡屋
仝　池谷書店
仝　鈴八書店
仝　渡邊書店
仝　文源堂
仝　内田書店
仝　谷島屋
仝　川瀨代助
仝　丸善書店
仝　三輪書店
仝　郁文堂
仝　河合文港堂
仝　若林書店
仝　松田庄助
仝　丸善書店
仝　吉岡平助
仝　盛文堂
仝　丸屋書店
同　積善館支店

久留米市　菊竹書店
熊本市　長崎次郎
鹿兒島市　吉田幸兵衛
高知市　開成舍
前橋市　萬卷堂
仝　煥乎堂
甲府市　柳正堂
長野市　西澤喜太郎
松本市　水琴堂
信州上諏訪　高坂文弘堂
長岡市　目黑書店
高田市　室直書店
富山市　中田書店
仝　小林書店
金澤市　近田書店
仝　横川書店
會津市　田中善平
仙臺市　佐藤養治
仝　高藤書店
仝　藤崎千書閣
千葉町　有
仝　多田屋書店
武州加須町　立眞舍
水戸市　松柏堂
仝　川又銀藏

92
12

084723-000-0

92-12

詩人と恋

関露香／著

M34
DBA-0048